

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第246集

博 多 18

—博多遺跡群第43次発掘調査報告—

1991

福岡市教育委員会

博 多 18

— 博多遺跡群第43次発掘調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第246集



遺跡調査番号 8852
遺跡略号 HKT43

1991

福岡市教育委員会

序

博多遺跡群は、JR博多駅より博多湾にかけて広がる弥生時代から中・近世に亘る複合遺跡です。弥生時代以来、大陸文化流入の門戸として栄え、とりわけ中世の国際都市「博多」の繁栄を物語る多種多量の輸入陶磁器の出土は、多くの関心を集めることとなっています。

近年、都心部の再開発が活発に進められ、それに伴って発掘件数も増加しています。

福岡市教育委員会では、工事によってやむを得ず消滅するこれら埋蔵文化財については、記録保存に努めているところあります。

本書は、昭和63年度に実施したビル建設工事に伴う第43次発掘調査の記録を収録したものです。本書が埋蔵文化財に対する市民の方々のご理解、さらには学術研究上役立つことができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理報告に至るまで三井不動産株式会社、清水建設株式会社をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜わりましたことに対し、心より感謝の意を表します。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

- 本書は、福岡市教育委員会が1989(平成1)年1月23日から4月17日にかけて発掘調査を実施した、ビル建設に伴う博多遺跡群第43次緊急発掘調査の報告書である。
- 遺構の呼称は記号化し、掘立柱建物→S B、井戸址→S E、土壙→S K、溝→S D、ピット→S Pとした。なお、遺構番号は第Ⅰ調査面から第Ⅳ調査面まで各調査面ごとに付し、種類に関係なく連番とした。ただし、S PはS Pだけで各調査面ごとに番号を付している。第Ⅰ調査面は100番台、第Ⅱ調査面は200番台、第Ⅲ調査面は300番台、第Ⅳ調査面は400番台となっている。
- 本書に記載した実測図のうち、土師器の壊や皿については底部調整痕を同右下に略して細かく表示している。巻上→粘土紐巻上げ、ヘラ→回転ヘラ切り、糸→回転糸切り、板→板目圧痕のことである。
- 本書に使用した遺構図は、下村　智・荒牧宏行・黒田和生・英　豪之・溝口武司・中神元志・松尾和浩・村山光喜・北山陽子が作成した。現場写真は下村が撮影した。遺物実測は下村と上方高弘が行なった。また、製図は下村の他、竹原りえが行なった。遺物写真は上方高弘の撮影による。
- 本書で用いる遺構図の方向は全て磁北である。
- 博多遺跡群第43次調査に係る遺物、記録類(図面、写真、スライドなど)は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理される予定である。
- 本書の執筆・編集は下村が行なった。

遺跡調査番号	8852	遺跡略号	H K T 43		
調査地地籍	博多区店屋町8,9番地		分布地図番号	049-A-1	
開発面積	407m ²	調査対象面積	240m ²	調査実施面積	247m ²
調査期間	1989(平成1)年1月23日-4月17日		事前審査番号	63-2-296	

本文目次

序

Iはじめに	1
1 調査に至る経過と調査組織	1
2 遺跡の立地と環境	1
II調査の記録	3
第I調査面	3
第II調査面	4
第III調査面	4
第IV調査面	8
主要遺構	9
IIIおわりに	29

挿図目次

Fig. 1 博多遺跡群位置図 (1/25,000)	2
Fig. 2 第43次調査地点位置図 (1/4,000)	2
Fig. 3 第43次調査区周辺図 (1/1,000)	3
Fig. 4 調査区範囲図 (1/300)	4
Fig. 5 第I調査面遺構配置図 (1/100)	5
Fig. 6 第II調査面遺構配置図 (1/100)	6
Fig. 7 第III調査面遺構配置図 (1/100)	7
Fig. 8 第IV調査面遺構配置図 (1/100)	8
Fig. 9 出土遺物実測図 (1) (1/3)	11
Fig.10 出土遺物実測図 (2) (1/3,1/6)	12
Fig.11 出土遺物実測図 (3) (1/3,1/6)	13
Fig.12 出土遺物実測図 (4) (1/3)	14
Fig.13 出土遺物実測図 (5) (1/3)	15
Fig.14 出土遺物実測図 (6) (1/3)	16
Fig.15 出土遺物実測図 (7) (1/3)	17
Fig.16 出土遺物実測図 (8) (1/3)	18
Fig.17 出土遺物実測図 (9) (1/3,1/6)	19

Fig.18	出土遺物実測図	10	(1/3)	20
Fig.19	出土遺物実測図	11	(1/3)	21
Fig.20	出土遺物実測図	12	(1/3)	22
Fig.21	出土遺物実測図	13	(1/3)	23
Fig.22	出土遺物実測図	14	(1/3)	24
Fig.23	出土遺物実測図	15	(1/3)	25
Fig.24	出土遺物実測図	16	(1/3)	26
Fig.25	出土遺物実測図	17	(1/3)	27
Fig.26	出土遺物実測図	18	(1/3)	28

図 版 目 次

- PL. 1 (1) 第Ⅰ調査面全景 (東から)
 (2) S D121出土状況 (西から)
- PL. 2 (1) S K103遺物出土状況 (東から)
 (2) S K133-135・157出土状況 (東から)
- PL. 3 (1) S K145出土状況 (南から)
 (2) S B177出土状況 (西から)
- PL. 4 (1) 第Ⅱ調査面全景 (西から)
 (2) S K201出土状況 (東から)
- PL. 5 (1) S K202出土状況 (北から)
 (2) S K204出土状況 (南から)
- PL. 6 (1) S K205出土状況 (西から)
 (2) S K228出土状況 (南から)
- PL. 7 (1) S K234出土状況 (東から)
 (2) S K245出土状況 (南から)
- PL. 8 (1) 第Ⅲ調査面全景 (東から)
 (2) S K303下面出土状況 (北から)
- PL. 9 (1) S K303上面出土状況 (西から)
 (2) S K308出土状況 (西から)
- PL.10 (1) S K318出土状況 (南から)
 (2) S K331・332出土状況 (南から)

- PL.11 (1) S K 333出土状況（東から）
(2) S E 309出土状況（南から）
- PL.12 (1) S E 311出土状況（西から）
(2) S E 327出土状況（東から）
- PL.13 (1) S K 403出土状況（東から）
(2) S K 404出土状況（西から）
- PL.14 出土遺物(1)
- PL.15 出土遺物(2)
- PL.16 出土遺物(3)
- PL.17 出土遺物(4)
- PL.18 出土遺物(5)
- PL.19 出土遺物(6)
- PL.20 出土遺物(7)
- PL.21 出土遺物(8)
- PL.22 出土遺物(9)
- PL.23 出土遺物(10)
- PL.24 出土遺物(11)
- PL.25 出土遺物(12)
- PL.26 出土遺物(13)
- PL.27 出土遺物(14)
- PL.28 出土遺物(15)
- PL.29 出土遺物(16)
- PL.30 出土遺物(17)
- PL.31 出土遺物(18)
- PL.32 出土遺物(19)
- PL.33 出土遺物(20)
- PL.34 出土遺物(21)
- PL.35 出土遺物(22)
- PL.36 出土遺物(23)

表 目 次

表 1 近世陶磁器一覽表	31
表 2 出土銅錢一覽表	32

I はじめに

1 調査に至る経過と調査組織

1988（昭和63）年8月12日付で、大阪市西区の甲陽株式会社と同じく大阪市東区の芙蓉土地建物株式会社から連名で、博多区店舗町8番及び9番地内における事務所ビル建設に伴う埋蔵文化財の事前調査願が教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、博多遺跡群の範囲内であり、これまで、南側及び北側の隣接地で埋蔵文化財の本調査を実施していることから、申請地は本調査が必要であると判断した。南側（第39次調査）は、古代から中世・近世にかけて、北側（第38次調査）は中・近世を中心とする良好な遺構・遺物群が検出されており、間に挟まれた申請地にも連続していることが容易に推測できた。したがって、これまでの成果をもとに本調査の協議をかね、既設ビル地下室で破壊されている部分以外を調査対象として本調査を実施することになった。調査は三井不動産株式会社の受託調査として行なった。調査組織は以下のとおりである。

調査委託：三井不動産株式会社 福岡支店

調査主体：福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎

調査総括：埋蔵文化財課長 柳田純孝 埋蔵文化財第2係長 飛高憲雄

調査庶務：埋蔵文化財第1係長 折尾 学 松延好文

調査担当：埋蔵文化財第1係 下村 智 荒牧宏行

調査作業：山部増人、村山光喜、坂井 誠、武藤 健、松尾和浩、中神元志、神尾順次、三浦義隆、瀬戸啓治、黒田和生、英 豪之、溝口武司、北山陽子、嶋ヒサ子、山本后代、松浦ウメノ、小陣福子、橘 良子、清原ユリ子、佐藤テル子、徳永ノブヨ、萬スミヨ、高田 茂

整理作業：上方高弘、安野 良、松尾綱世、竹原りえ、島野素子、吉村知子

2 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は、福岡平野の中央部を北西に流れる郡河川と江戸時代に開拓された石堂川とはさまれた砂丘上に位置している。北は博多湾に面し、南は石堂川開拓以前に郡河川に流入していた旧比恵川によって画されている。博多遺跡群の本格的な調査は、地下鉄線内紙園町工区から開始され、築港線拡幅工事に伴う事前の発掘調査に加え、民間開発に伴う発掘調査も既に70次近くになっている。これまで、弥生時代から中世・近世にかけての集落址や墓地が調査され、夥しい数の遺構・遺物が検出されている。

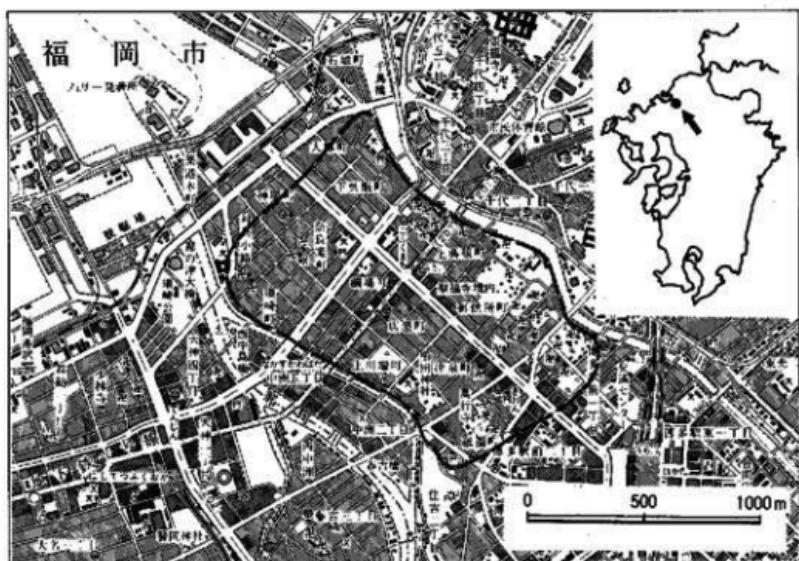


Fig. 1 博多遺跡群位置図 (1/25,000)



Fig. 2 第43次調査地点位置図 (1/4,000)

II 調査の記録

発掘調査は、旧建物の基礎除去後から開始し、既に現地表から-1.6m前後の擾乱層がスキ取られた状態からであった。博多遺跡群の場合、生活面が重層的に堆積しているので、余程の鍵層でもない限り同一時期の生活面を検出するのは難かしい。そこで任意の調査面を設けて掘り下げを行なった。調査面は第Ⅰ面から第Ⅳ面までの4面である。

第Ⅰ調査面 (Fig. 5, PL. 1)

擾乱層除去後の面を第Ⅰ調査面としたが、部分的に深い擾乱が残存していた。標高3.6m前後である。検出遺構は、土壙69基、井戸址4基、溝3条、1間×1間の掘立柱建物1棟、ピット69個と単独に出土した瓦質及び常滑の大甕3個である。土壙は、近世の廃棄物処理遺構が多く調査区東側に集中している。18世紀を中心とした伊万里染付磁器や肥前系の陶器、在地系の陶器などが多量に出土している。第43次調査の出土遺物のうち半数以上がこの近世陶磁器である。近世陶磁器は近代になって廃棄処分されたものも含まれそうである。調査区西側は、近世遺構が少くなり、レベルがやや低いところで12~13世紀の遺構が検出できる。井戸址は3基

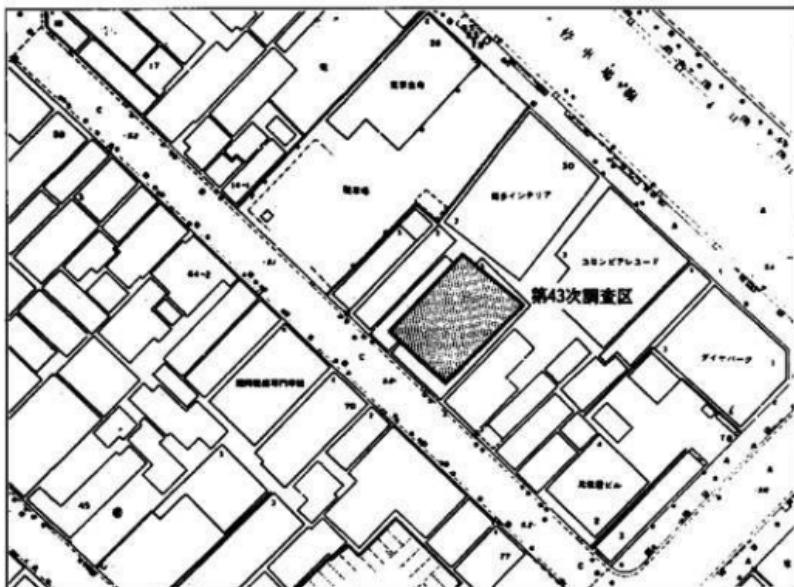


Fig. 3 第43次調査区周辺図 (1/1,000)

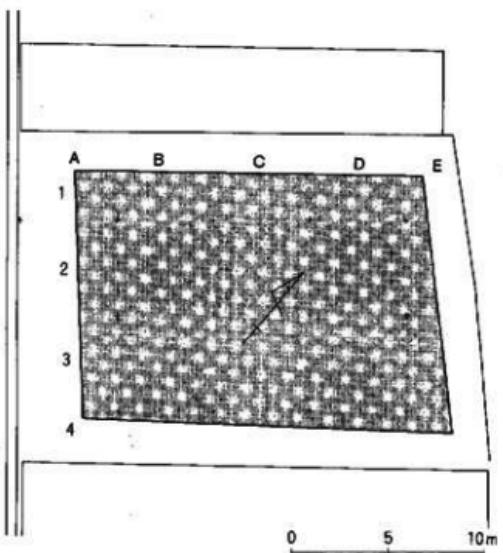


Fig. 4 調査区範囲図 (1/300)

が近世のものである。

そのうち、2基は瓦組の井戸である。溝は3条検出され、SD121はN 44° Eをとる。これと直角方向にSD136と137が走る。3条とも淡褐色に焼土粒子の混入した覆土をもち、時期的には同一と考えられる。これらの溝は、部分的に深くなるところが見られ、疊も多く、水路などではなくて町割を区画する施設のひとつではないかとみられる。SB177はこれらの溝に方向を揃える

1間×1間の建物である。柱穴には扁平砾をすえ礎板としている。桁行2.3m、梁行2.2mでは正方形に近い。溝及び掘立柱建物は15~16世紀に属するものとみられる。土壤のうち長方形のものは、溝と方向を揃えるものが多い。

第Ⅱ調査面 (Fig. 6、PL. 4)

第Ⅰ調査面から30~40cm掘り下げた面である。標高3.2m前後で遺構確認を行ったところ土塹48基、ピット40個が検出された。土壤は、長方形、楕円形、円形、不定形などがあり、長方形のものは方向が揃っているものが多い。時期的には12~13世紀を中心とするが、14~15世紀のものもあり、中には上面の掘り残しもみられた。SK228・234・245などには遺物が集中して検出された。また、第Ⅰ面で確認したSK145の下半部にも白磁の四耳壺をはじめ多くの遺物が出土している。SK205の最下に白磁がかたまって出土したが、これは少し掘りすぎた感があり、下の遺構のものかも知れない。SK244からは塙底壁際に立った状態で鞘付の短刀が出土している。

第Ⅲ調査面 (Fig. 7、PL. 8)

上面からさらに30~40cm掘り下げた遺構検出面である。標高は2.8m前後を測る。基盤の黄白色の砂が多く見られるようになり、遺構もこの黄白色の砂層に掘り込まれるものが多い。検

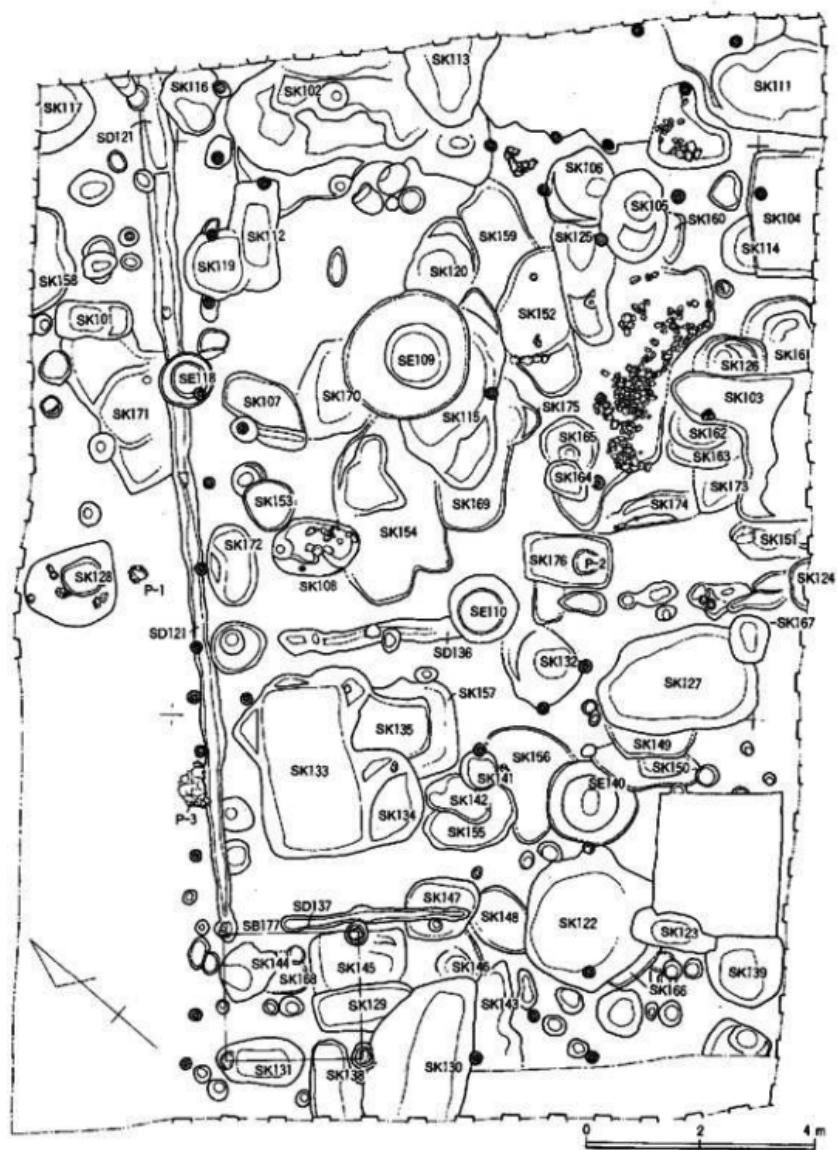


Fig. 5 第Ⅰ調査面構造配置図 (1/100)

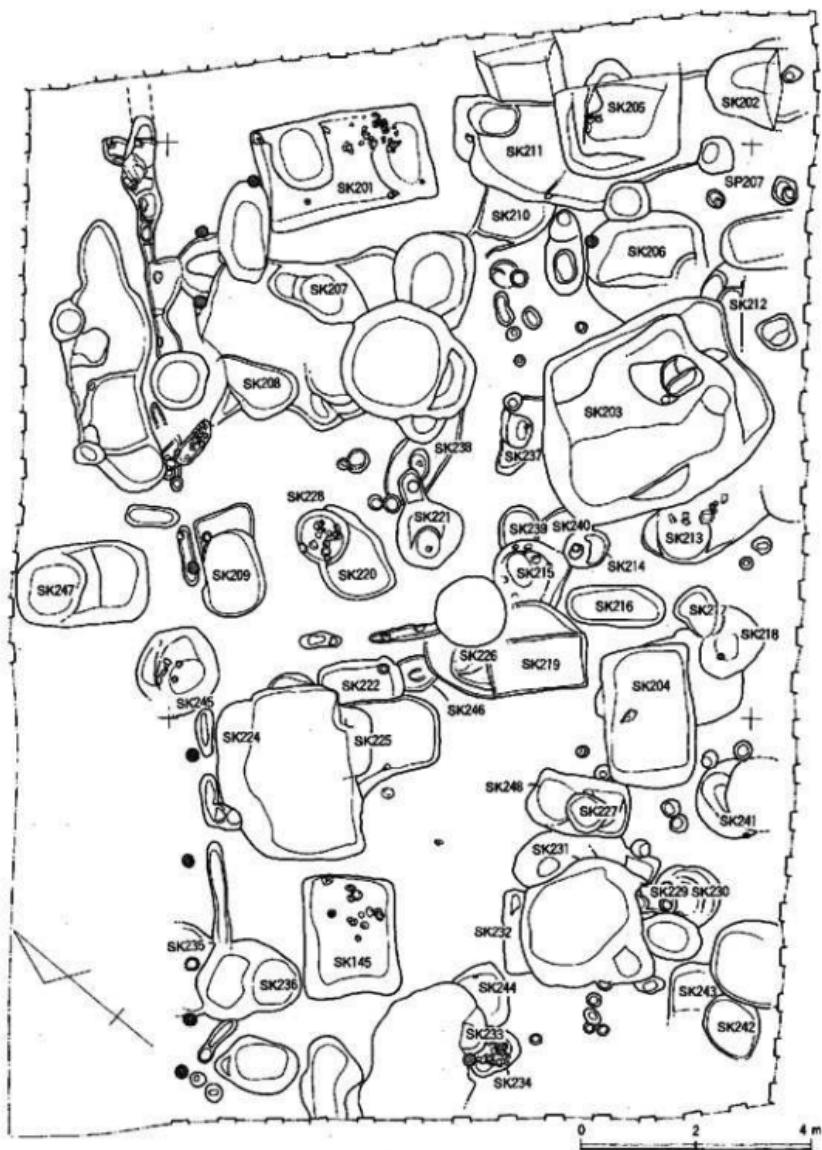


Fig. 6 第II調査面造構配図 (1/100)

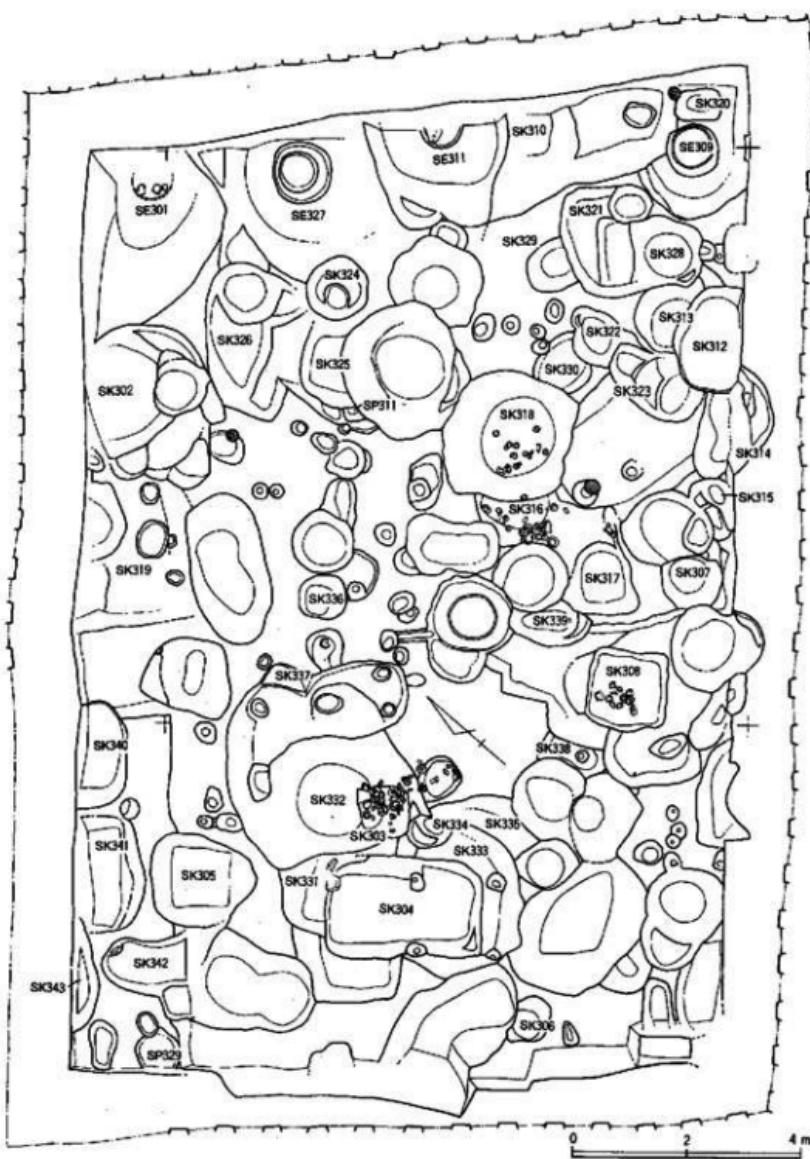


Fig. 7 第Ⅲ調査面遺構配置図 (1/100)

出遺構は、土壙39基、井戸址4基、ピット29個である。土壙は、円形及び楕円形を呈するものが多くなり、方形及び長方形を呈するものが組み合わさる。方形の土壙には板材などは確認できなかった。遺物がまとまって出土したのは、SK 303・304・308・312・316・318・341などである。SK 303は、検出面では東西に広がって遺物の分布が認められたが、横底は小さな方形であった。本来はもっと大きな土壙であった可能性がある。出土遺物は土器の壺や皿、瓦器碗、白磁が集中して出土している。12世紀前半代。SK 304・305・308・341は、長方形や方形を呈するもので白磁を中心に出土している。上部に新しい時期の遺物も含まれるが、12世紀前半から中葉の時期が考えられる。SK 312・316・318・332は、円形や楕円形の土壙である。主に、白磁、瓦器、土器が出土している。土器のうち、壺や皿は底部が粘土紐巻上げや回転ヘラ切り調整になっているものが殆どである。11世紀後半から12世紀前半にかけてのものであろう。井戸址は4基確認しているが全て東壁側に位置しており、SE 301・311は半分しか調査できなかった。断面を見るとかなり上面から掘り下げられており、12世紀代の遺物も多量に出土しているが、本来は14・15世紀のものであろう。井筒に樋を使用している。SE 327は

時期的には14世紀と考えられるが、井筒に太鼓の転用品が用いられている。例り抜きで洞がやや膨らみ、下端に鉄釘が連続して打ち込まれている。遺物は時期的に古いものが掘方や井筒から多量に出土している。SE 309は、12世紀後半の井戸址である。井筒に樋を使用し、白磁を中心とする遺物が多量に出土している。第Ⅲ調査面は井戸址を除けば、11世紀後半から12世紀にかけての時期が考えられる。

第Ⅳ調査面 (Fig. 8, PL. 13)

調査区北西部で検出した製鉄場址を中心とする調査面である。上層が4基確認された。標高2.3mでSK 401からは鐵滓や鉄素材、SK 402からは鐵滓、SK 403からは鐵素材、SK 404からは最終工程の鐵滓が出土。9~10世紀代か。

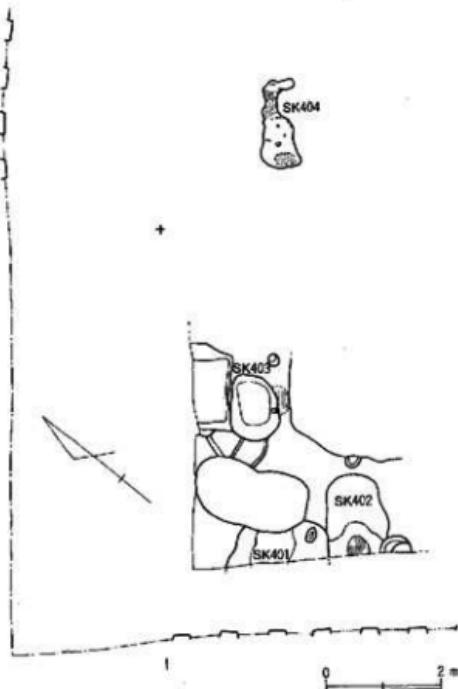


Fig. 8 第Ⅳ調査面遺構配置図 (1/100)

主要遺構

各調査面について簡単に概要を述べたが、その中で、主要な遺構と思われるものについて幾つか取りあげておきたい。

S K 102・103・111～113・119・120 (Fig. 5, PL. 2・14～25) 第I調査面で出土した近世の土壌群である。主に調査区東側で検出したが、調査前の基礎擾乱掘りで東側が西側よりも30cm程高かったので良く残存していたのかも知れない。灰を多く含む暗灰色の土で覆われ近世の陶器類が雜然と混入していた。廃棄物を処理した土壌であろう。S K 102は幅4.5m、深さ0.4mの不定形な形を呈しており、東側は未調査区へ広がる。S K 103も不定形上坡で、幅2.4m、深さ0.25mを測る。半分は南側の未調査区へ広がっており、全体の様子は分らない。S K 111は楕円形を呈する土壌である。南側が未調査区へ伸びているので長径ははっきりしないが、短径は1.7m、深さ0.45mを測る。S K 112は長方形を呈し、長辺1.9m、短辺0.8m、深さ1.2mで残りの良い土壌である。S K 113は半分が未調査区へ広がる。短径1.6m、深さ1.1mを測り、楕円形状を呈する深い土壌である。S K 119は径1.2m、深さ1.0mの円形土壌である。S K 120は、S E 109に切られており、径1.5m、深さ1.1mの円形土壌である。他の土壌よりもやや古い遺物が出土している。この他、S K 01・04～08・15・16・29・30なども同様な性格の遺構と考えられる。

S D 121・136・137 (Fig. 5, PL. 1) 第I調査面で確認した溝状遺構である。S D 121は幅0.2～0.5mで、深さは部分的に異なっている。深い部分では第III調査面に達している所がある。方向はN44°Eをとる。これとほぼ直角に接合するのがS D 136・137である。S D 121に比べて浅く一部しか残存していないかった。S D 121との接合部は1m前後開いており、S D 136と137との間隔は4.8～5.4mである。3条とも淡褐色土に焼土粒子の混入した埋土を持つ。15世紀を中心として、やや前後する時期が考えられる。これらの溝に軸線を描いて配置される遺構は、第I調査面ではS K 127・133・145、SB177、第II調査面ではS K 201・204～206・216・219などの掘立柱建物や長方形土壌である。これらの時期は15世紀代を中心に14世紀から16世紀まである。S D 121・136・137は太閤町割が行なわれる以前の町割に関する遺構と考えられる。

S K 127・133・145 (Fig. 5・6・9・10・12, PL. 3・26・31) 溝状遺構と方向を同じくする土壌で、S K 127は隅丸長方形を呈する。長さ2.8m、幅1.8m、深さ0.6mで横底は皿状に窪む。遺物は、土師壺・皿、陶器壺・壺、白磁碗、青磁碗、明色絵、明染付が出土している。15～16世紀のものと考えられる。遺物は他に石鍋、砥石、鉄滓、鉄釘、板状・円盤状・棒状の銅製品、宝珠状の鉢状小形銅製品などが出土している。S K 133は長さ3.0m、幅1.8m、深さ1.2mの大形の長方形上坡である。四隅の壁は垂直に近く立ち上がっているが板の痕跡などは確認できなかった。覆土には多量のカーボンと焼石、鉄滓、鉄釘、轆の羽口などの遺物が含まれる。

れていた。石製品には石鍋、球状に加工した滑石、メンコなどがある。退化した蓮弁文を持つ青磁碗が出土していることなどから14~15世紀の時期とみられる。床面からは魚の骨や獸齒・骨なども出土している。145はS D 137の下から出土したもので長さ2.1m、幅1.6m、深さ0.8mを測る。遺物は上層、下層に分けて出土しているが、下層の土師皿・壺、白磁碗、陶器碗、白磁壺などの一括遺物は下の遺構に属する可能性が大きい。上層の遺物は14世紀前半である。

S B 177 (Fig. 5, PL. 3) 調査区西側で検出した桁行1間(2.3m)、梁行1間(2.2m)の独立柱建物で、柱穴の掘方は0.4m前後である。柱穴の底には0.25m前後の扁平磚を礎板にしている。15~16世紀の時期の建物であろう。溝状遺構と方向を描えている。

S K 202・209 (Fig. 6・14, PL. 5・29) 近世の遺構の中でも初期伊万里や古伊万里・古唐津を出土する土壙である。長径1.5~2.0m、深さ0.85~1.15mの楕円形を呈する。S K 202からは日の字鳳凰文の梁付皿が出土している。近くの包含層からも唐津皿などが出土。

S K 201・204・205 (Fig. 6・12・13, PL. 4~6・29) 溝状遺構と方向を描える長方形土壙である。S K 201は長さ3.0m、幅1.8m、深さ0.8mを測る。壙底が深んでいるのは井戸址と切り合になっているからである。上層から李朝白磁碗が出土している。15~16世紀。S K 204は長さ2.5m、幅1.5m、深さ0.7mである。古い遺物も出土しているが14~15世紀のものが中心である。S K 205は半分が未調査区へ広がる。幅2.2m、深さ1m。15~16世紀。

S K 228・234・244・245 (Fig. 6・15~17, PL. 6・7) 第II調査面検出で遺物が剖とまとまって出土した土壙である。S K 228は中央部に位置し径0.9m、深さ0.7mの円形土壙である。ヘラ切りの土師器類が一括して出土している。11世紀後半~12世紀初頭か。S K 234は西側に位置する小さな土壙であるが、遺物が多量に出土している。白磁が中心で陶器碗、捏鉢、瓦質の大甕、壺などが出土している。白磁壺の底部露胎部分に「渦綱」の墨書銘がある。S K 244は1.1mの略方形で深さ1.0mである。轆付の短刀が壁際に直立して出土している。S K 234・244は12世紀前半。S K 245は12世紀後半~13世紀の円形土壙である。径1.4mである。

S K 303・304・308・312・316・318・333・341 (Fig. 7・18~24, PL. 8~11・32~35) 第III調査面で検出した主要な土壙である。壙底が方形を呈するものはS K 303・308・333・341である。長方形はS K 304、楕円形はS K 312、円形はS K 316・318である。S K 304の大きさは、長さ2.7m、幅1.7m、深さ0.4m。S K 308は0.8mの正方形で深さ0.4mを測る。S K 318は大きな円形土壙で径2.2m、深さ0.9mである。これらの土壙は殆どが12世紀前半に属し、古いものは11世紀後半まで遡る。新しいものでも12世紀中頃と考えられる。

墨書陶磁器 (Fig. 8・9・11・15~17・20・25・26, PL. 36) 各遺構から数点の墨書陶磁器が出土している。「蒸花押」、「蒸」、「錢」、「卅二口」、「渦綱」、「禮花押」、「十」などの人名や数字などがある。その他、花押だけのものやしらし状の墨書もある。S K 319出土の黄釉鉄絵盤には、墨書ではないが鉄絵で「長命富貴」と大書する。土師壺にも墨書のみられる例がある。

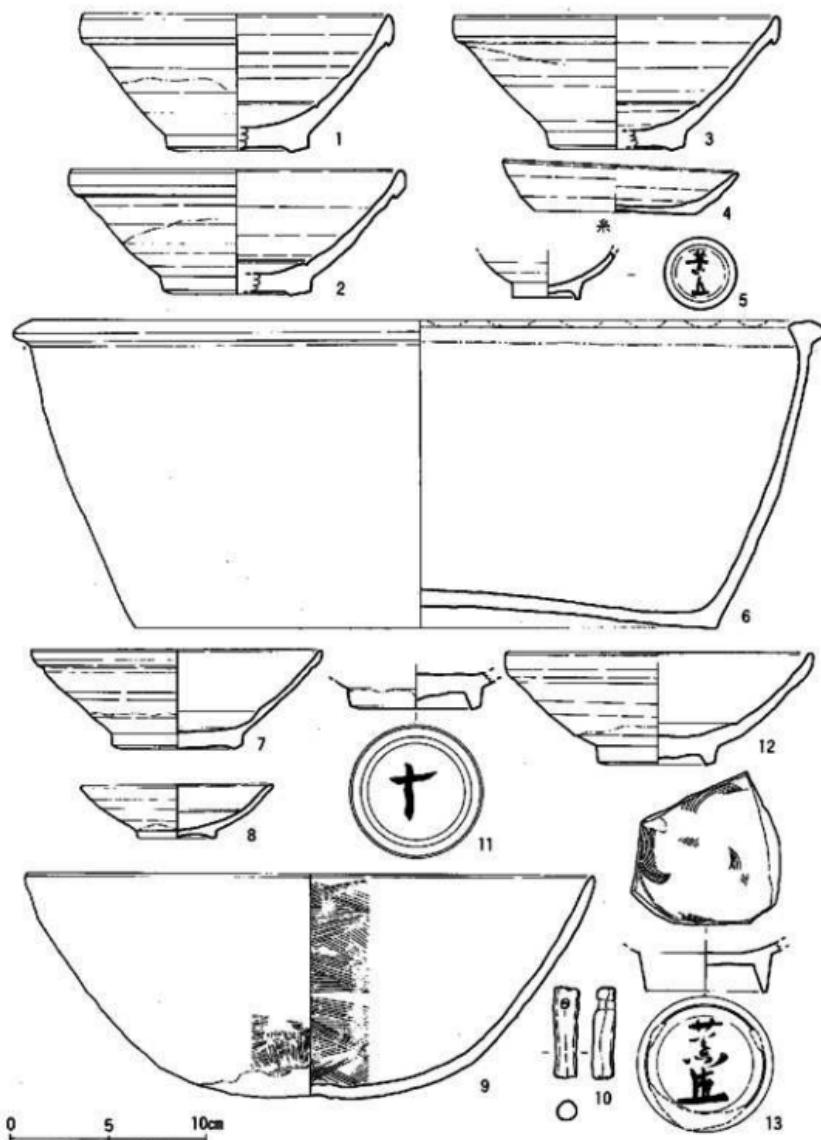


Fig. 9 出土遺物測量図(1) (1/3)

1~5,7,8,11~13:白器 4:土器器 6:陶器 9:土器器・土鍋 10:十輪
1~4: SK122 5: SK127 6~8,10: SK130 9: SK132 11,12: SK133 13: SK139

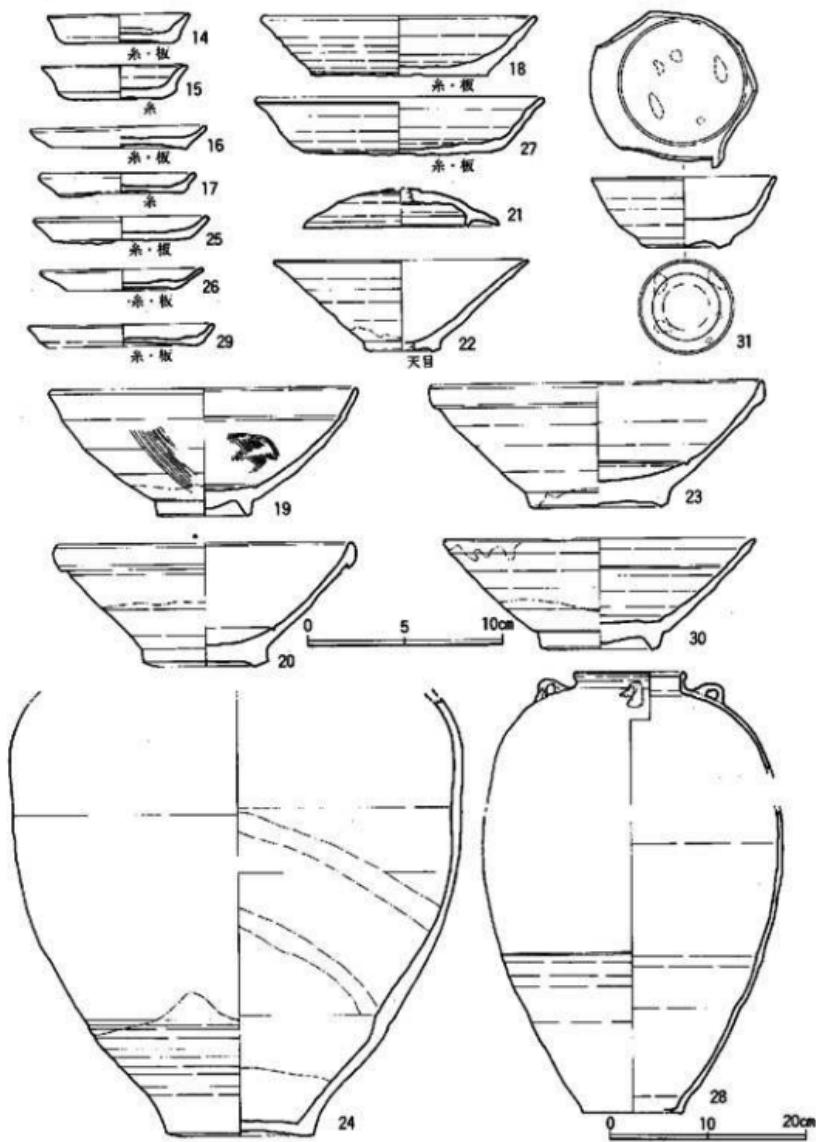


Fig. 10 出土遺物実測図(2) (1/3, 1/6)

14~18, 25~27, 29: 土器盤 19, 20, 23, 30: 内縁 31: 陶器白盤 21, 22, 24, 28: 陶器
 14, 15: SK139 15~19: SK142 20: SK143 21~24: SK144 25, 26: SK145
 27: SK146 28: SK147 29, 30: SK148 31: SK151

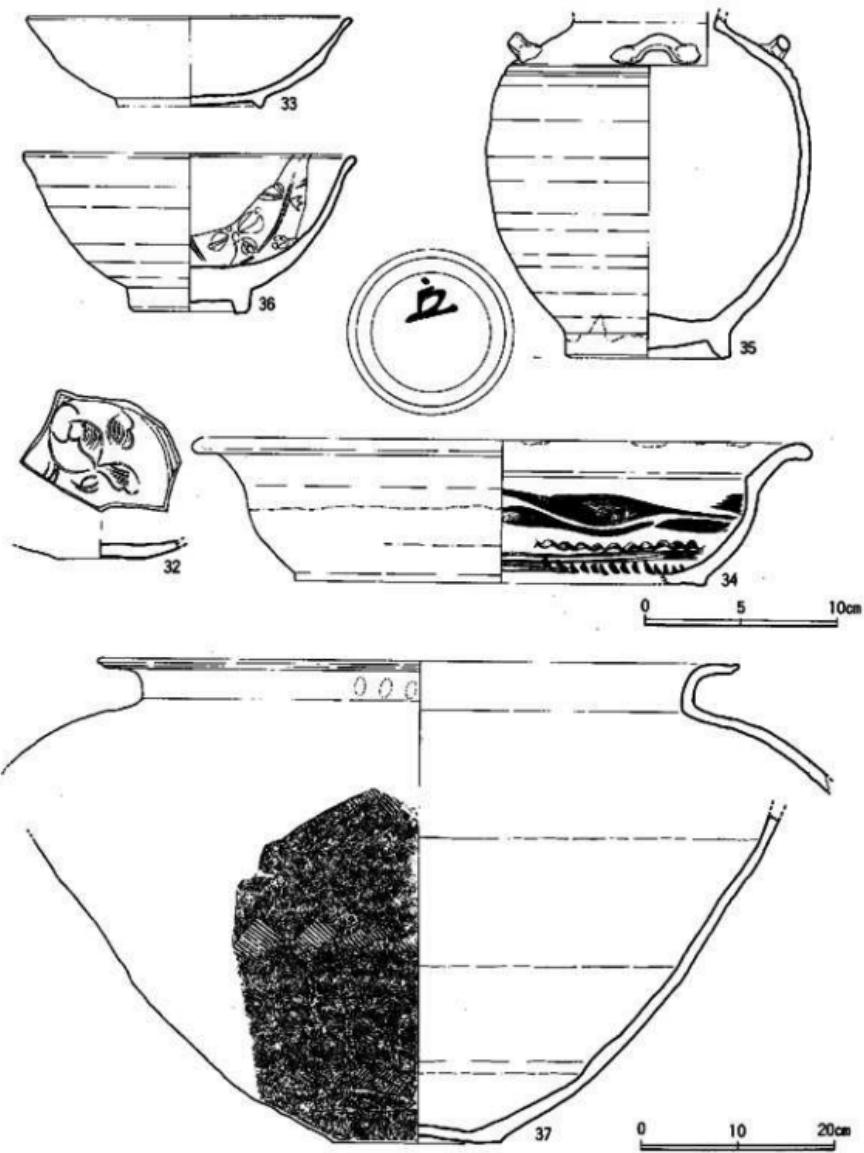


Fig. 11 出土遺物実測図(3) (1/3, 1/6)

32,36:白磁 33:瓦器 34:陶器 35:高麗青磁 37:常徳
32:SK154 33:SK156 34:SK168 35:SE140 36:I.C4区包含層 37:I.B2区P-3

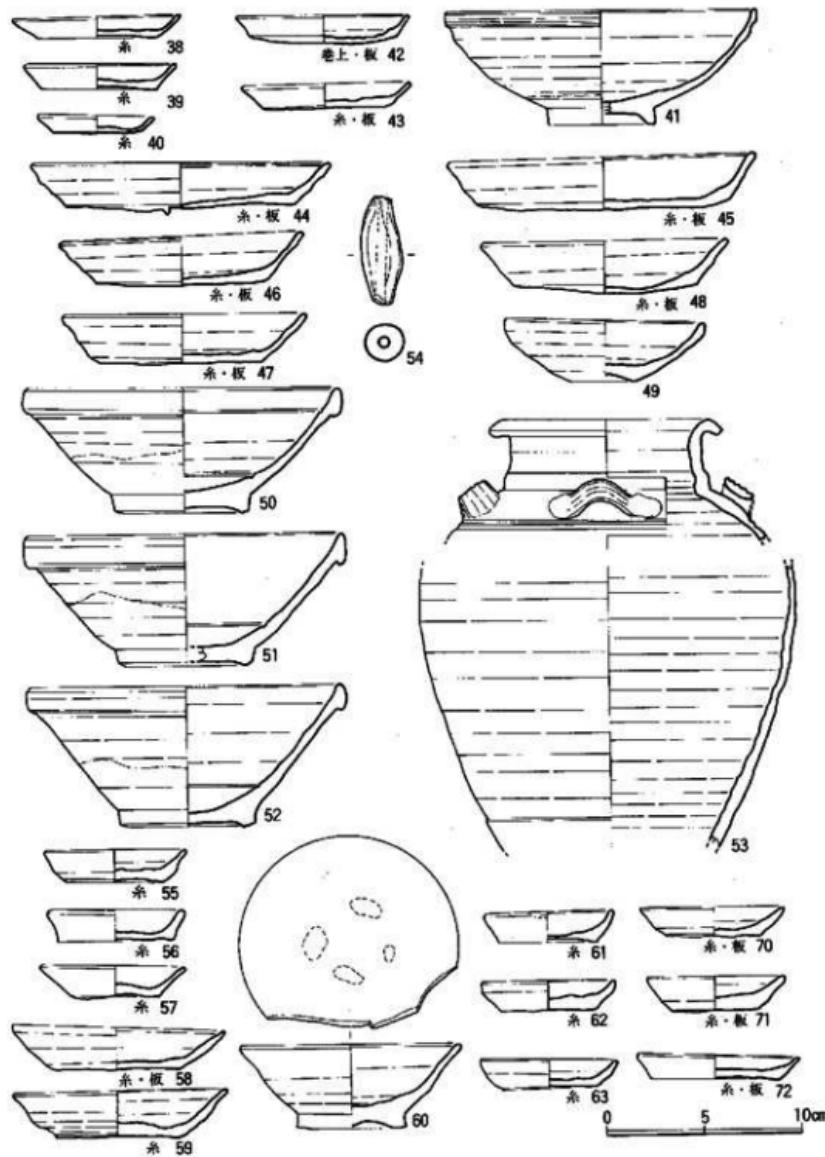


Fig. 12 出土遺物実測図(4) (1/3)

38~40, 42~48, 55~59, 61~63, 70~72: 土器
 41, 50~53: 白陶
 49: 陶器
 54: 土錠
 60: 李朝白陶
 38~40: SK115 41: SK135 42~54: SK145 55~60: SK201 61~63: SK203 70~72: SK204

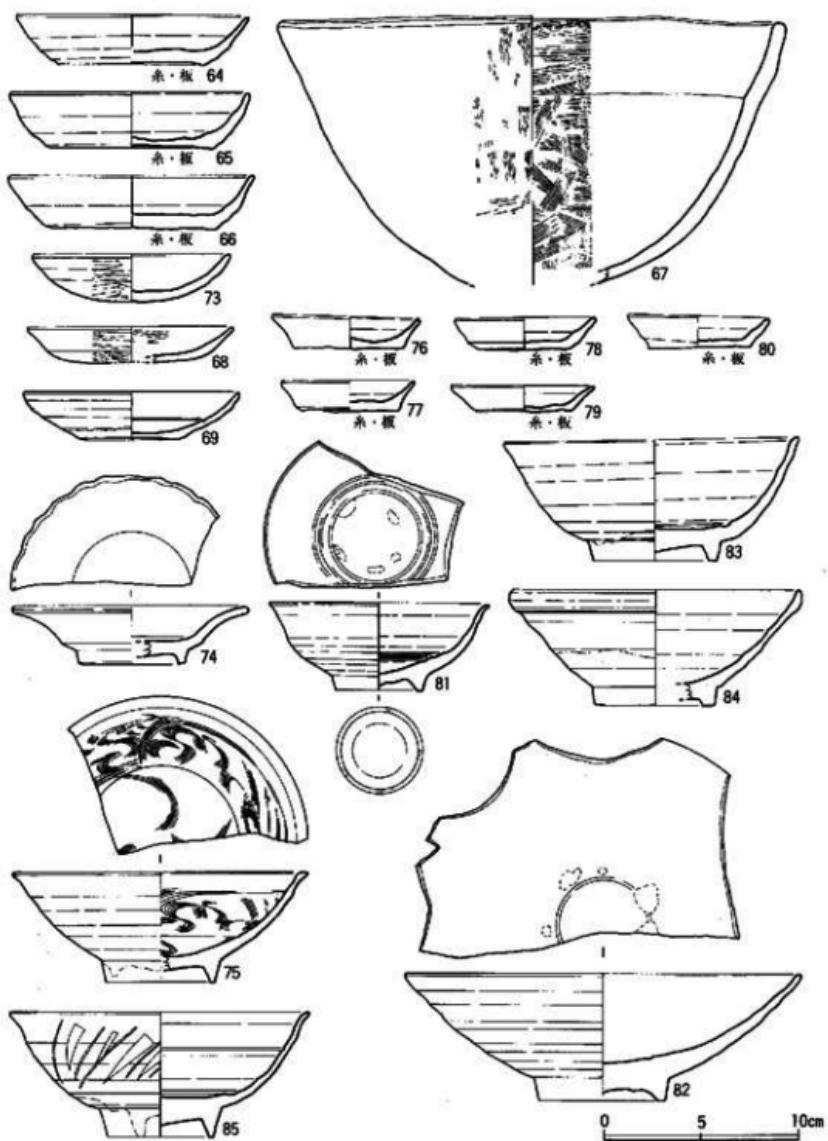


Fig. 13 出土遺物実測図(5) (1/3)

64~66, 76~80: 土器
67: 土器
68, 73: 瓦器
74: 青銅
69, 75, 83~85: 白銅
81, 82: 李炳白
64~68: SK203
73~75: SK204
76~85: SK205

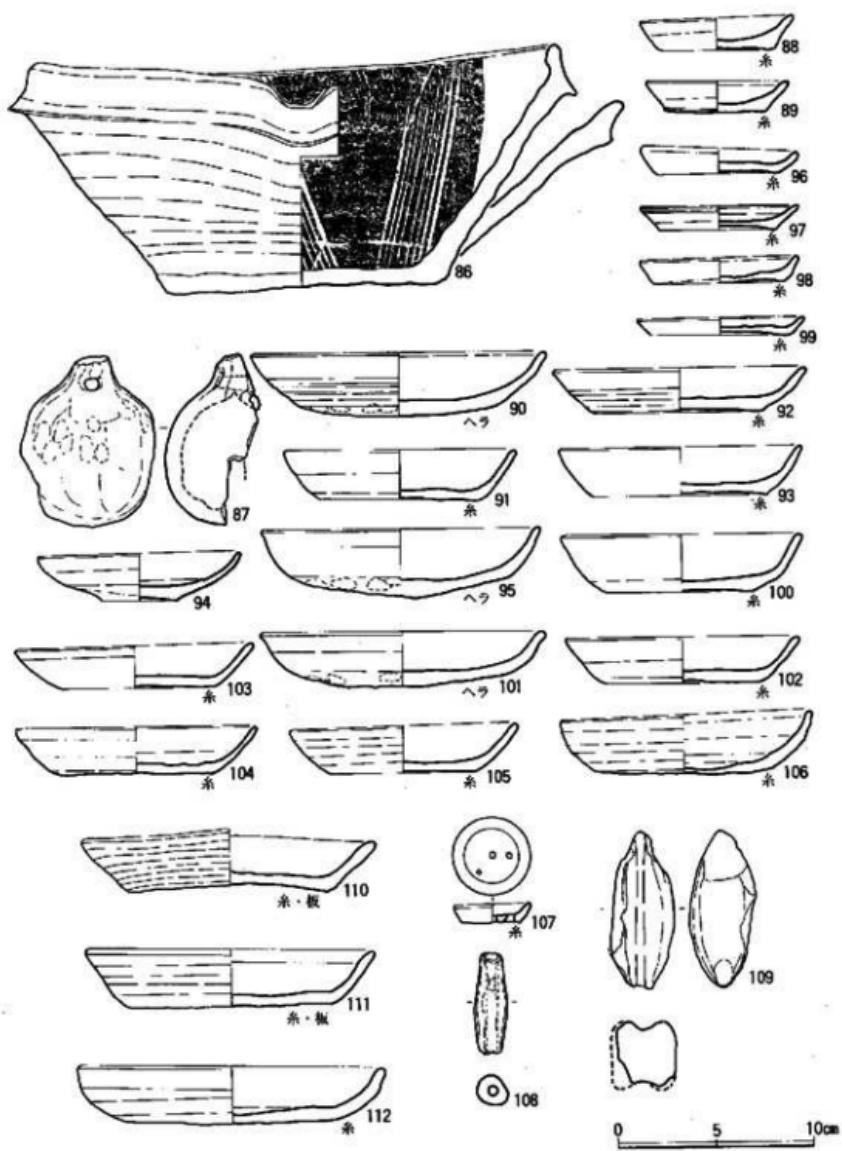


Fig. 14 出土遺物実測図(6) (1/3)

86: 瓢前陶器 87: 十輪 88~93: 土器類 94: 白組 106, 109: 土器
 86: SK206 87: SK209 88~93: SK213 94, 95: SK214 96~102: SK215
 103~105: SK218 106, 107: SK219 108, 109: SK225 110~112: SK226

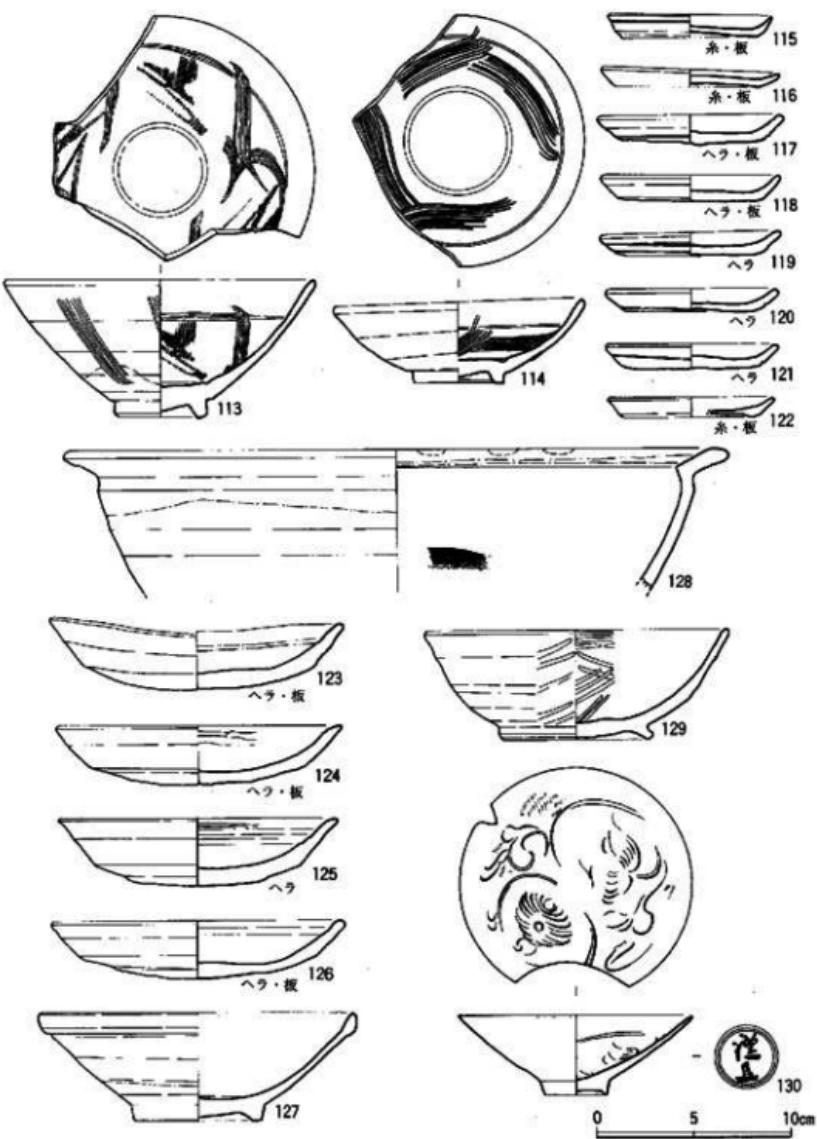


Fig. 15 出土遺物実測図(7) (1/3)

113, 114: 青釉 115~126: 土師器 127: 白釉 128: 陶器 129: 瓦器 130: 青白釉
113~116: SK226 117~128: SK228 129, 130: SK230

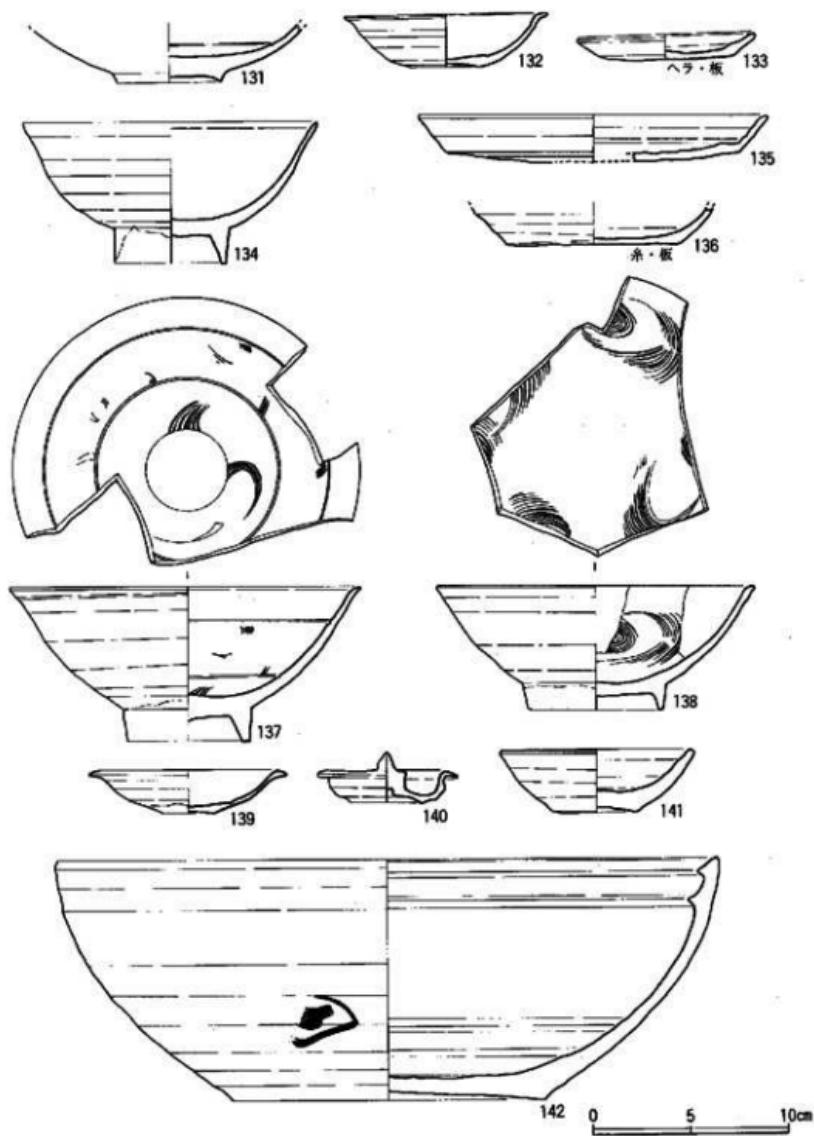


Fig. 16 出土遺物実測図(8) (1/3)

131: 青磁 132, 134, 137~139: 白磁 133, 136: 土師器 135: 瓦当器 140~142: 陶器
131, 132: S K230 133~135: S K231 136: S K232 137~142: S K234

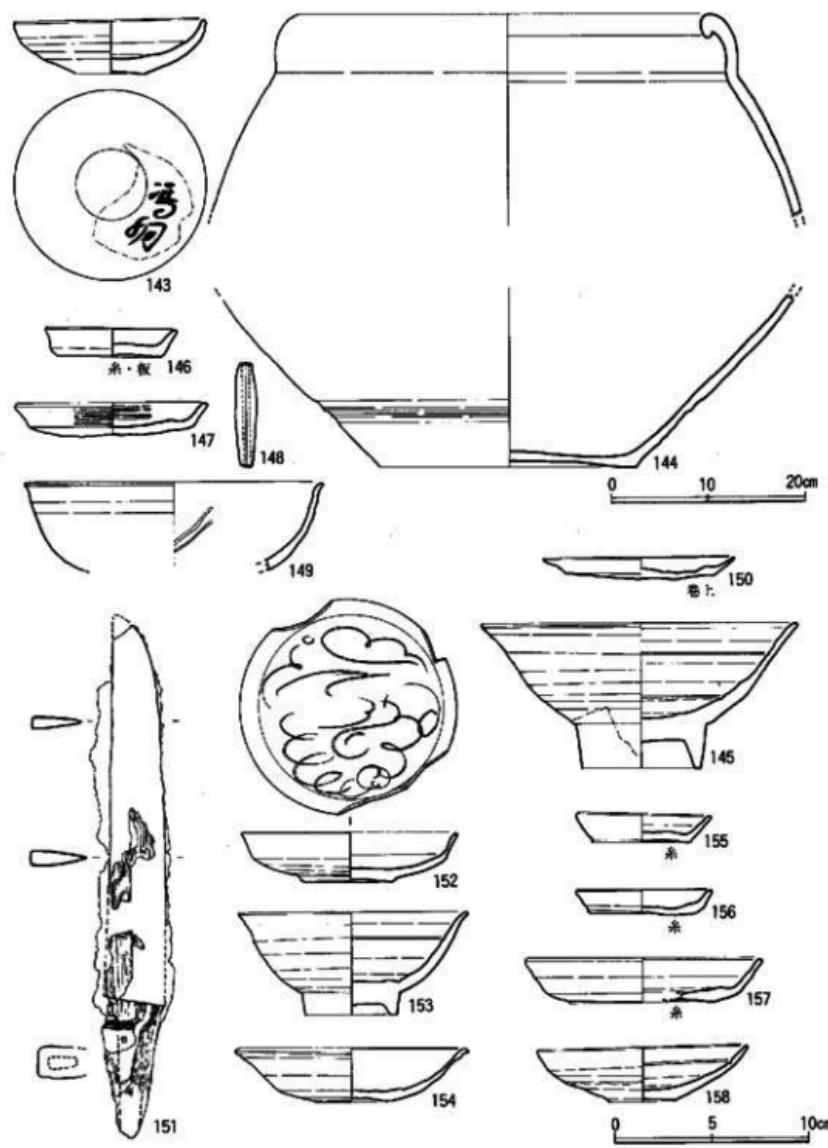


Fig. 17 出土遺物実測図(9) (1/3, 1/6)

143, 145, 152, 153, 158: 白盤 144, 147, 149: 瓦盤 146, 150, 155~157: 土器盤 151: 鉄短刀 148: 土鍬
 143~145: SK234 146: SK235 147, 148: SK236 149: SK238 150: SK241 151~154: SK244
 155~157: SK245 158: SP207

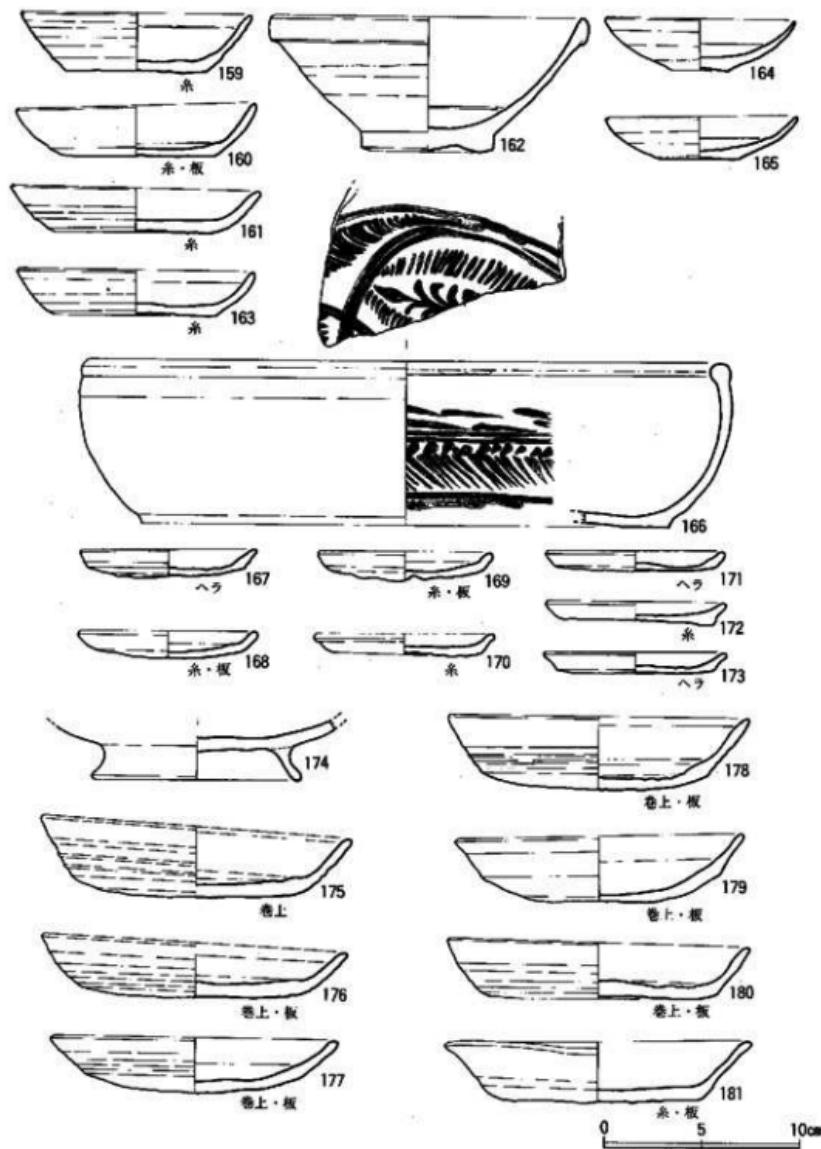


Fig. 18 出土遺物寫真図 (1/3)

159~161, 163, 167~181: 上飾器 162, 164, 165: 口沿 166: 両器
 159~162: SK219 163: SK218 164: SK222 165: SK240 166: SK248 167~181: SK303

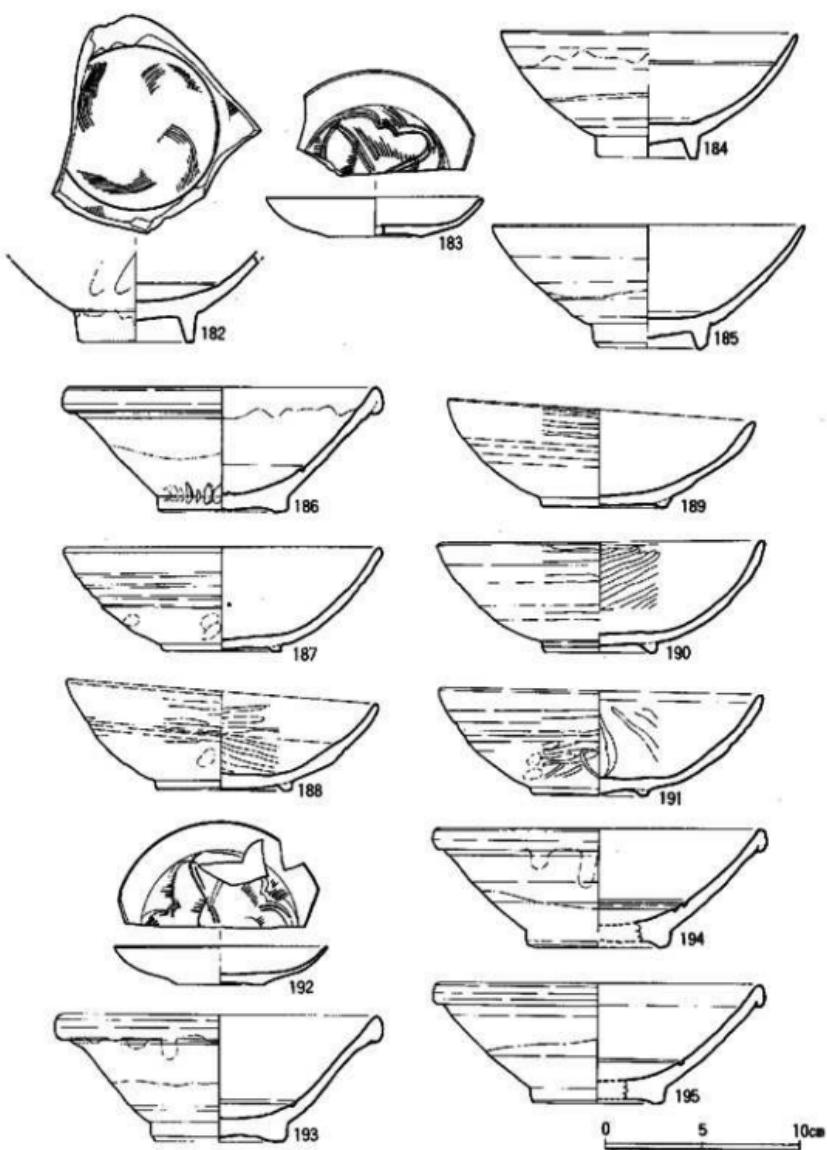


Fig. 19 出土遺物実測図(1) (1/3)

182, 184~186, 193~195: 白磁 187~191: 瓦器 183, 192: 青白磁
182~191: S K303 192~195: S K304

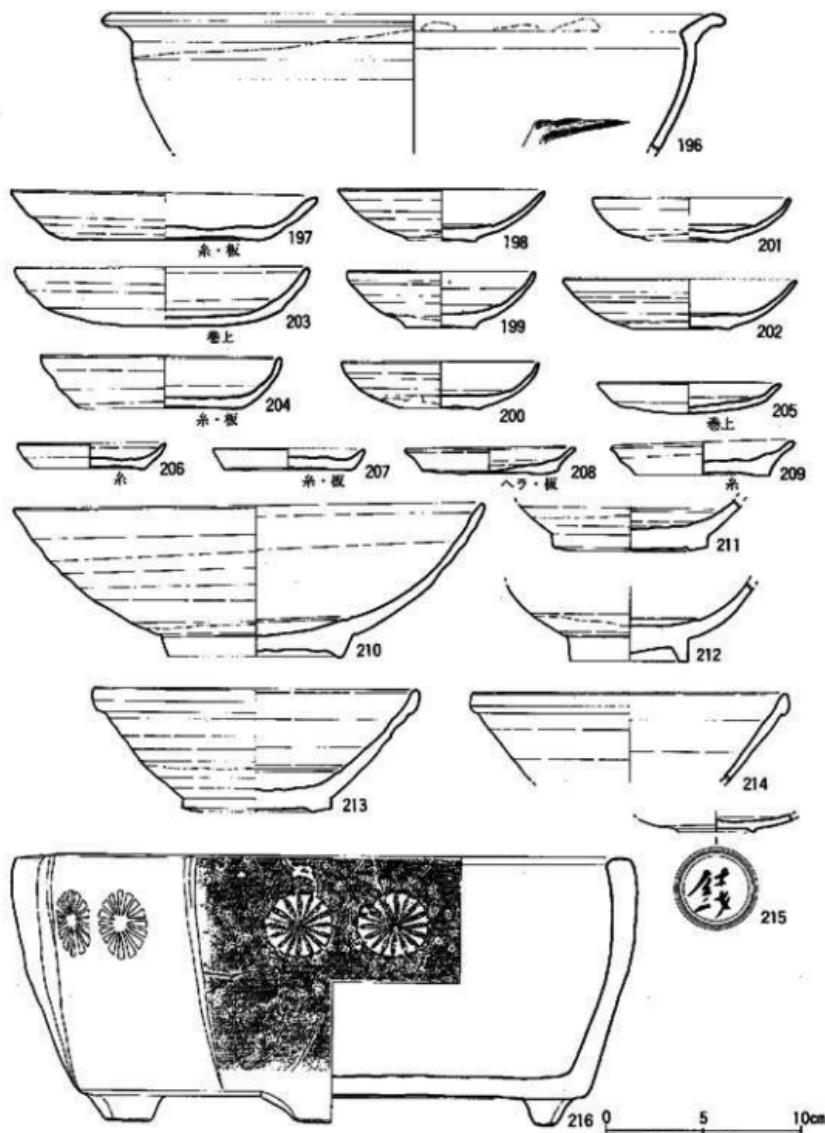


Fig. 20 出土遺物実測図 (1/3)

196: 魚器 197, 203~209: 土師器 198~202, 210~215: 白磁 216: 瓦器
196: S K 304 197~202: S K 305 203~216: S K 308

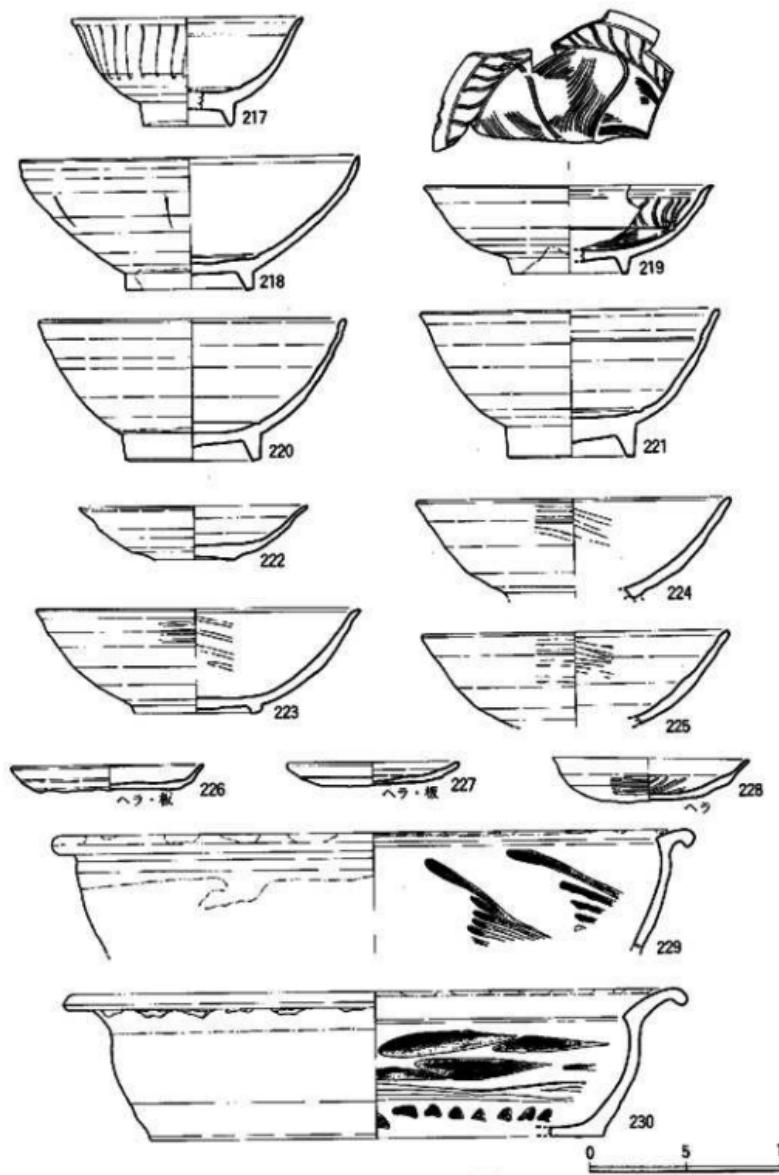


Fig. 21 出土遺物実測図 10 (1/3)

217-220,223:白磁 221:青磁 223-225:瓦器 226-228:土器類 229,230:陶器
217: SK310 218-228: SK312 229: SK313 230: SK316

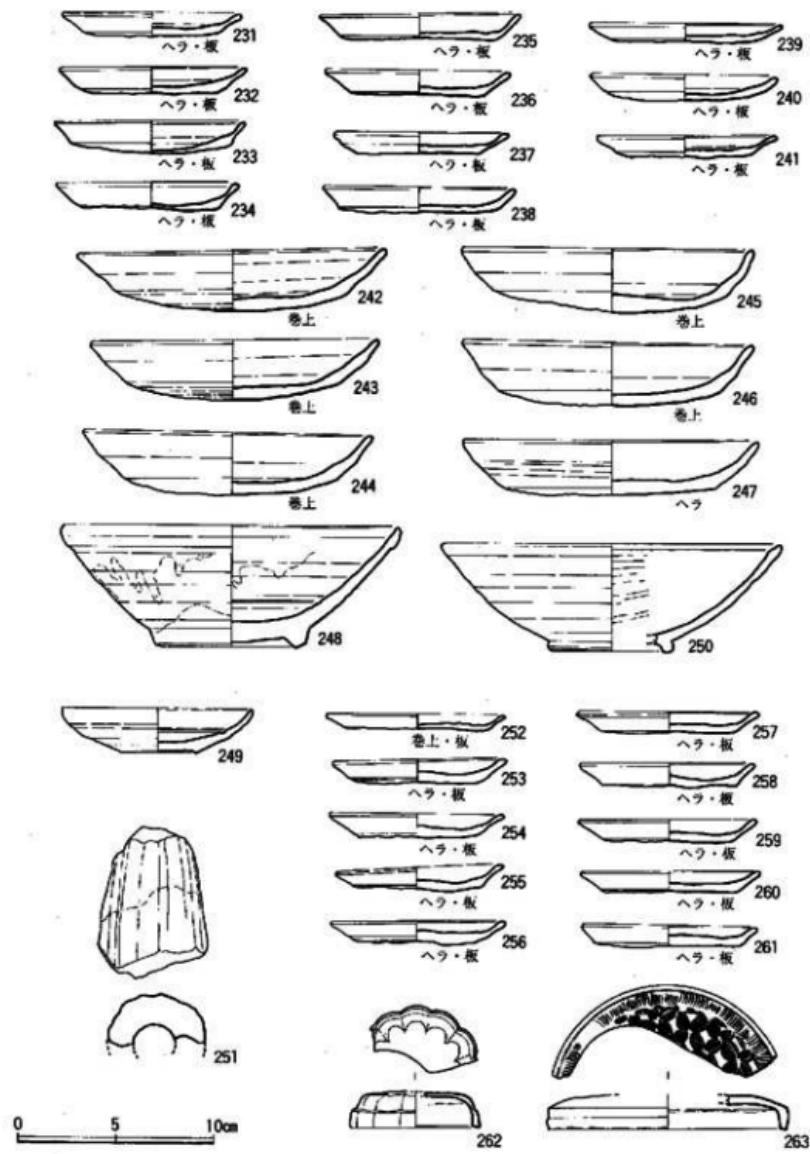


Fig. 22 出土遺物実測図(1/3)

231~247, 252~261: 土器部 248, 249: 白磁 250: 白磁 251: 緑・羽口 262: 青白磁 263: 青磁
231~249: SK316 250, 251: SK317 252~263: SK318

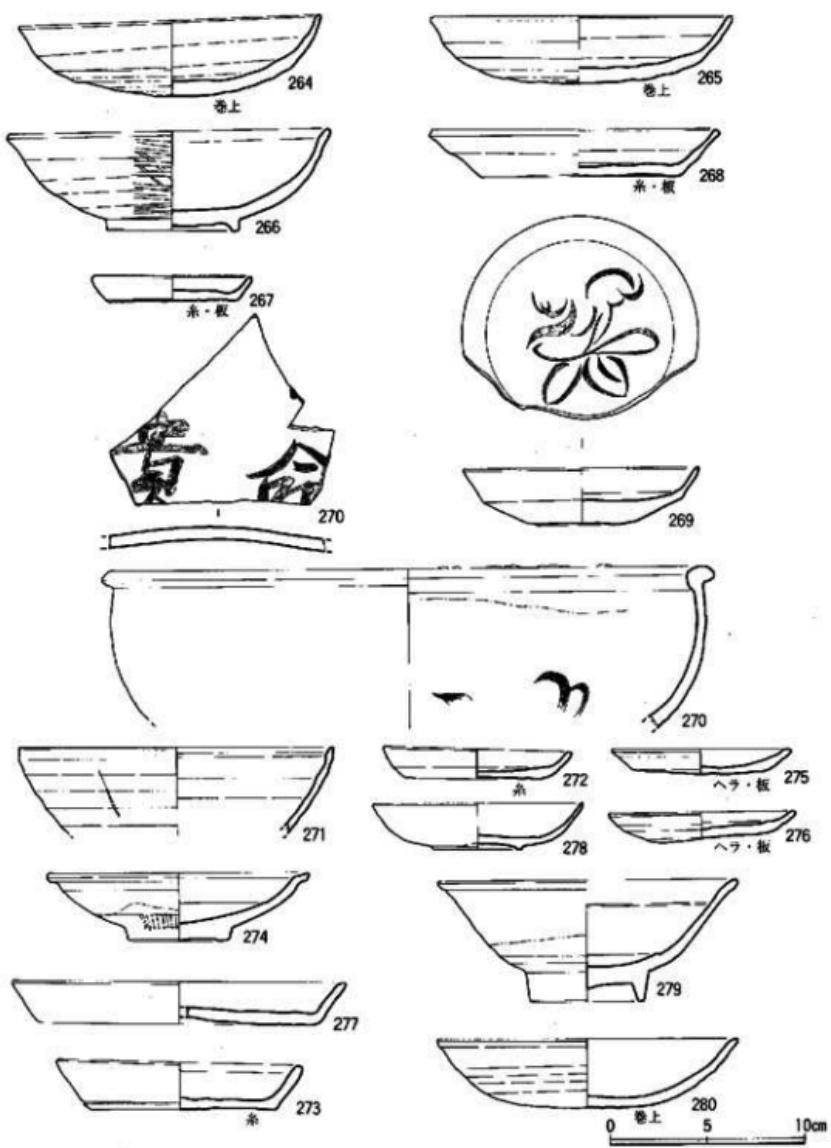


Fig. 23 出土遺物実測図 (1/3)

264, 265, 267, 268, 272, 273, 275, 276, 280 : 土器
 266 : 瓦器
 269 : 青磁
 270 : 陶器
 271, 274, 275, 279 : 白磁
 272 : 紙巻器
 264~266 : SK318
 267~270 : SK319
 271~273 : SK323
 274 : SK331
 275~279 : SK332
 280 : SK338

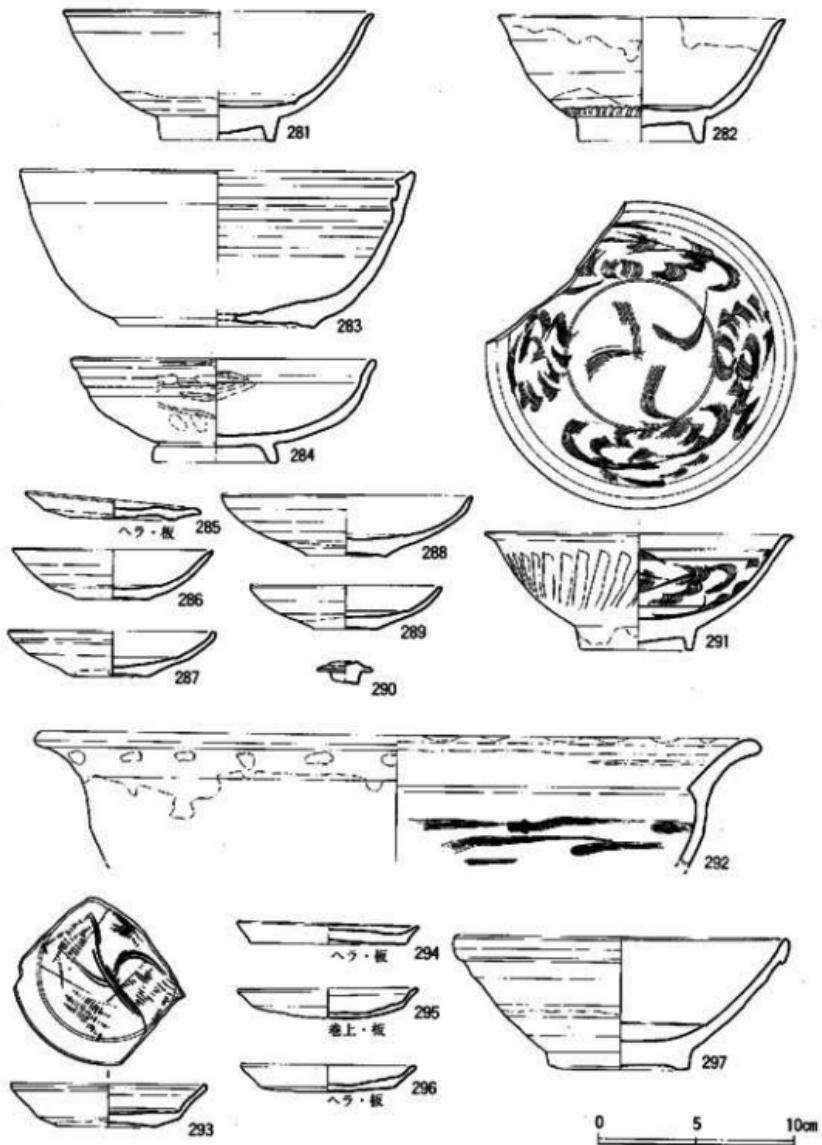


Fig. 24 出土遺物実測図(10) (1/3)

281,282,286~291,297：白楊 283,292：梅蘭 284：瓦器 285,294~296：土師器 295：青磁
281~284：S K 338 285~291：S K 341 292：S E 109 293,294：S E 110 295~297：S E 309

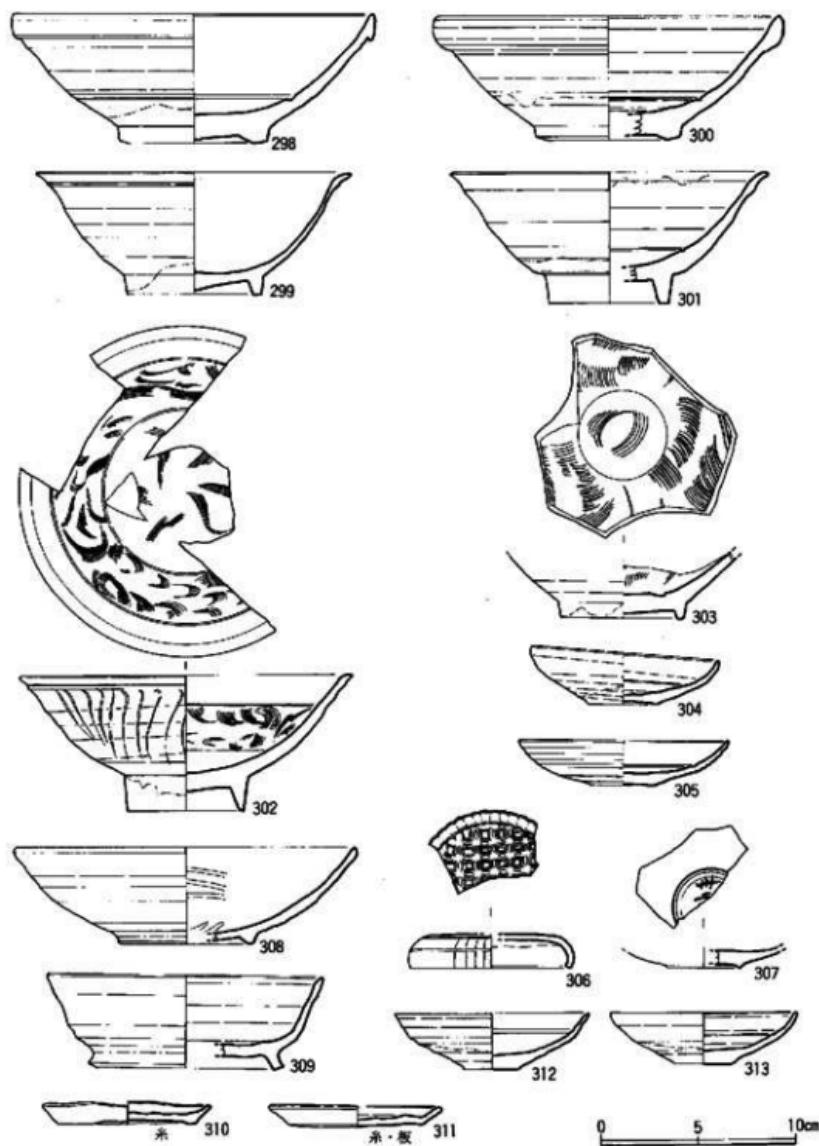


Fig. 25 出土遺物実測図(1) (1/3)

296-305, 307, 312, 313: 白器 306: 青白器 308: 瓦器 309: 漆器
296-309: S E 308 310-313: S E 327

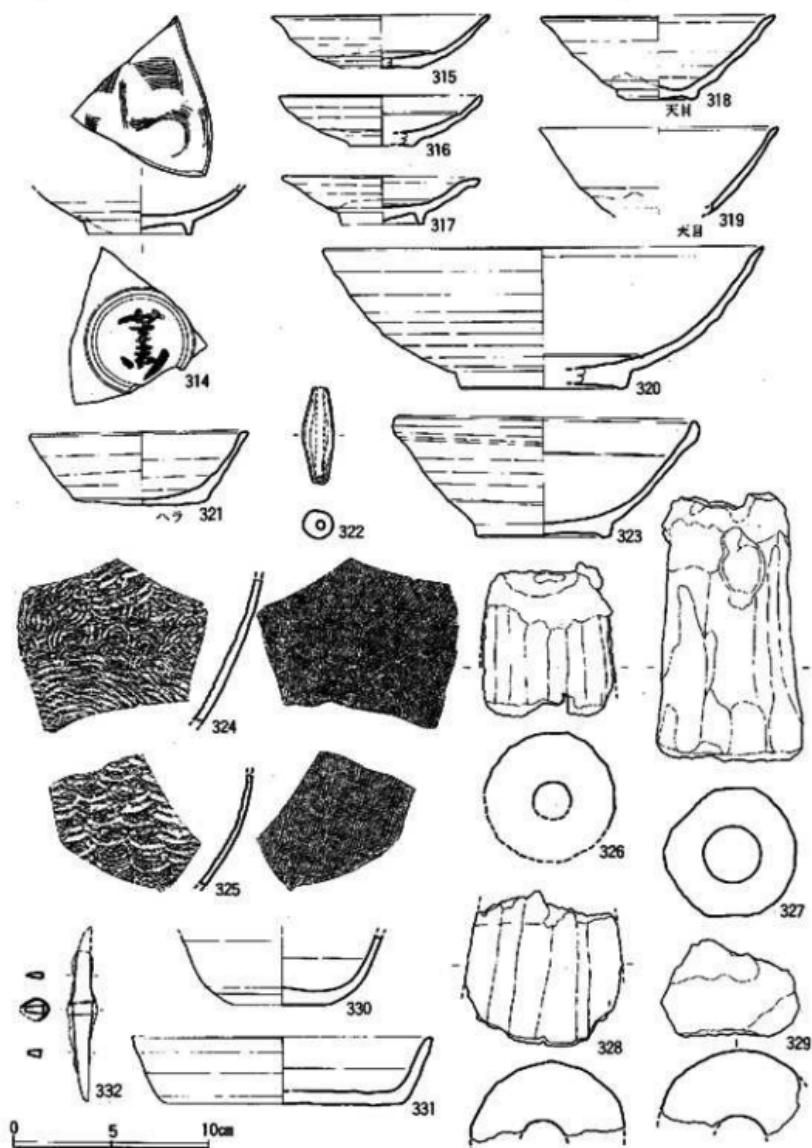


Fig. 26 出土遺物実測図(10) (1/3)

314~317, 321, 323: 内模
 318, 319: 開口
 320: 土器
 322: 土器
 324, 325, 330, 331: 磁化器
 326~329: 横・開口
 332: リフ
 314~320: S E327
 321: S P311
 322: S. B1区包含層
 323: S P320
 324: S K401
 325: S K403
 326: S. C2区包含層
 327: S K403
 328, 329: S K404
 330: S. B1区包含層
 331, 332: S. B2区包含層

III おわりに

博多遺跡群第43次調査は、第Ⅰ調査面から第Ⅳ調査面まで4面の調査を行ない、古代から中・近世にかけての遺構を多数検出した。土壙160基、井戸址8基、溝3条、掘立柱建物1棟、遺物の出土したピット138個である。遺物量も厖大で、面積の割には遺物量の多いのが博多遺跡群の特徴である。できるだけ図化を試みたが充分とは言い難い内容である。遺物の解説、個別遺構の図化・説明が殆どできなかった。今後、機会があれば補足していきたいと考えている。

ここでは、各調査面で検出した遺構や遺物について各時期ごとに概要して補足説明としておきたい。

時期的に最も古い遺構は古代に属する製鉄炉址4基である。SK401と402は削平が激しく半分は未調査区へ広がっているので全体の様子ははっきりしない。SK403は略長方形の土壙で長さ1.15m、幅0.85m、深さ0.35mを測る。東側の長辺側が赤変しており完形の轆の羽口が据え置かれた状態で出土している。SK404はSK403の東側3.5mの位置にあり、炉址というよりは鉄滓や焼土、破損した轆の羽口などが棄て置かれた状態のものであった。出土した鉄滓は各遺構ごとに性格が異なっており、新日鉄の大澤正己先生によれば、SK401は鉄滓と鉄素材が中心、SK402は鉄滓、SK403は鉄素材が主体を占め、SK404は最終工程の鉄滓であるとのご教示を得た。出土遺物は炉址から須恵器の甕の破片、周辺からは須恵器の坏、轆の羽口、鉄刀子などが出土している。これらの炉址は時期的には同一とみられ、9~10世紀の時期を考えておきたい。なお、第Ⅳ調査面は調査区全体を振り下げるが、遺構の存在が確認できたのは調査区北西部のみであった。遺構は西側及び北側に広がるものと考えられる。

11世紀後半から12世紀代になると遺構の数が増えてくる。主に第Ⅲ調査面で確認した土壙群が中心となる。円形もしくは方形が主体でSK333では四隅に柱穴がみられた。同期に属する遺構は、SK228~230・232・234・236・239・240~244・248・302~308・310・312~318・320~323・328~342とSE309である。

12世紀後半から13世紀にかけての遺構は第Ⅱ調査面で主に出土し、第Ⅲ調査面と第Ⅰ調査面からも出土している。図化している遺物は残りの良いものを中心におこなったので、必ずしも遺構の時期を示しているとは限らない。時期決定には図化していない他の遺物も検討して行なった。この時期に属する遺構は、SK147・148・150・166・168・170・218・222・226・227・229・233・237・245・246・247・319・325・343とSE301である。

13世紀の終りから14世紀代にかけての遺構は第Ⅰ調査面及び第Ⅱ調査面を中心に出土地してい。この時期の遺構は、SK122・134・135・142・144~146・151・155・156・158・163・169・173・213~217・219~221・223・235・238・324・326とSE140・327である。SK145出土の

一括遺物は、墳底を掘り過ぎたため、下部遺構の S K 304に属する可能性がある。

14世紀の終りから15・16世紀にかけての遺構は第Ⅰ調査面で多く検出され、第Ⅱ調査面でも切り合ひ関係などではっきりしなかったものが出土している。この時期の遺構は、15世紀までのものと、16世紀まで下るものがあったが一括して取り扱っている。土壙、井戸址、溝、掘立柱建物などがあげられる。この時期に該当する遺構は、S K 114・123・127・128・131～133・138・139・143・149・152～154・157・159～162・164・165・167・171・174～176、S E 311、S D 121・136・137、S B 177である。S D 121の方向はN 44°Eをとり、S D 136・137はほぼ直角に近い形で配列されている。S D 136はN 132°E、S D 137はN 136°Eで、S D 121との接合部は1m前後開いている。S D 136と137との間隔は4.8m～5.4mである。これらの溝は、覆上、出土遺物も同じで、時期的な同時性を示している。またこれらの溝は水の流れる用水路みたいなものではなく、部分的に深い所があり第Ⅱ調査面まで達している部分があった。一番深いところは第Ⅲ調査面までピット状に残っていた。幅0.2～0.5mで、溝内には根固め状の襍があり町前に関係する何らかの施設があったものと考えられる。この時期の長方形土壙、掘立柱建物はほぼこれらの溝に軸線を揃えて配列されている。

第Ⅰ調査面では近世の土壙が多数出土した。殆どが廃棄物処理遺構で近世陶磁器が多量に出土している。また近世の井戸址も3基検出している。この時期の遺構は、S K 101～108、111～113、116・117・119・124～126・129・130・141・172・202・209とS E 109・110・118である。S K 172・202・209からは初期伊万里や古伊万里の染付磁器が出土している。

その他、遺物としては、第Ⅰ面包含層から内面に型押の堆線と花文を持つ高麗青磁が出土。また、楠葉型の瓦器碗がS K 204・222・241から出土している。

石製品は、滑石製の石錠が多く見られ、15世紀以降の土壙からは硯の出土が多くなる。滑石製の有溝石錠がS K 112・154で、滑石製の硯がS E 301で、硯を模した小型の滑石製品がⅡ面包含層から出土。その他、滑石製の小型容器がS K 236とⅡ面の包含層から、石臼がS K 120から、弥生時代の石錠がⅢ面包含層からそれぞれ出土している。

鉄製品は、短刀がS K 204と244、刀子がS E 311とⅡ面及びⅣ面の包含層から、鉄製の輪の付いた紡錘車が1組S K 147から出土している。鉄釘は多くの土壙で検出された。

銅製品は、石突様の小形銅製品がS K 201で、銅鋤がS K 205・247、銅鈴がS K 111、宝珠状の錐状銅製品がS K 127で、棒状銅製品(簪か)がS K 215でそれぞれ出土している。また、銅製品ではないが、コマの輪状の鉛錠がⅡ面包含層で1例検出されている。

土製品では、塚がS K 122・170・215・234、S D 137から、有溝土錠がS K 225・326から、輪の羽口がS K 133・317・336、S P 316からそれぞれ出土している。

表1 近世陶磁器一覧表

調査番号	名 営	出 所	年 代	備 考
PL-14-1	伊万里焼青磁	9.9 4.0 5.1	SK-102	コンニャク等物
-2	-	9.9 4.0 5.0	-	-
-3	伊万里焼青磁	11.6 4.8 6.2	-	見返五角花文・角葉・唐草
-4	伊万里焼青磁	11.8 4.6 6.4	-	見返五角花文・外唐草小品の幾付
-5	-	9.9 3.8 5.0	-	-
-6	-	9.2 3.3 4.9	-	宝珠文
-7	-	9.5 3.1 3.2	-	正絹文・山文
-8	-	12.0 5.0 6.8	-	正絹文
-9	伊万里焼青磁	10.0 3.2 3.2	-	唐草
-10	伊万里焼青磁	- 4.1 3.4	-	見返五角花文
-11	伊万里焼青磁	17.7 6.1 4.9	-	見返五角花文・山文
-12	-	13.2 7.7 3.8	-	見返五角花文・山文
PL-15-13	-	12.3 7.5 3.7	-	見返五角花文・山文・角葉
-14	-	20.1 11.5 4.2	-	見返五角花文・山文
-15	伊万里焼青磁	15.3 8.9 5.0	-	山口燒青磁・山口焼
-16	伊万里焼青磁	13.2 7.7 3.8	-	手描文・山口焼(シロヤマヨウ)
-17	-	12.4 7.5 1.9	-	見返四角花文・山文・寶珠文
-18	-	18.6 11.1 4.2	-	虎足ハリカミ
PL-16-19	伊万里焼青磁	3.6 5.1 2.8	-	唐津字・吉田文・角葉
-20	伊万里焼青磁	- 7.9 -	-	見返五角花文・山文
-21	伊万里焼青磁	- 5.5 -	-	見返五角花文・角葉
-22	陶器付	- 4.3 -	-	-
-23	伊万里焼青磁	6.5 5.0 7.7	-	内・虎足花文・片脚付
-24	伊万里白磁	13.4 4.3 4.2	-	輪花文・虎足・見返花文
-25	伊万里白磁青磁	6.7 6.3 5.7	-	三足・内脚露窓
-26	伊万里白磁青磁	12.3 6.1 -	-	-
-27	伊万里白磁大瓶	4.5 10.2 3.5	-	片付
-28	伊万里白磁小瓶	7.3 3.2 3.5	-	-
-29	伊万里白磁瓶	6.3 2.7 2.8	-	-
-30	伊万里白磁瓶	8.4 2.9 2.8	-	-
-31	伊万里白磁小瓶	7.4 2.6 3.4	-	-
-32	伊万里白磁瓶	5.6 3.7 3.2	-	-
-33	-	7.2 2.3 2.1	-	-
-34	伊万里白磁瓶	4.5 1.4 1.3	-	-
-35	伊万里白磁瓶	6.2 2.9 2.1	-	-
-36	伊万里白磁瓶	7.1 3.0 2.5	-	-
PL-17-17	陶器付	9.2 3.0 5.2	-	波瀬系・色刷付
-38	-	9.0 2.9 5.8	-	-
-39	-	9.4 2.8 5.7	-	虎足・曲足・波瀬
-40	-	9.1 2.7 5.4	-	波瀬系・虎足・馬口鑄
-41	-	9.2 3.6 5.5	-	波瀬系・虎足露窓
-42	-	10.6 4.2 4.5	-	波瀬系・曲足
-43	タカラ赤絵	3.5 3.6 3.2	-	-
-44	陶器付	1.5 3.8 3.2	-	波瀬系・虎足・波瀬露窓
-45	陶器付	12.8 5.6 2.5	-	波瀬系・基丸の1脚
-46	-	17.3 2.5 1.8	-	台形底付に虎足
-47	陶器付	11.9 4.3 2.7	-	波瀬系
-48	陶器付	15.1 5.0 5.1	-	波瀬系・虎足
-49	陶器付	- 5.1 -	-	波瀬付
-50	陶器付	12.0 4.8 5.8	-	-
-51	陶器付	3.5 3.6 5.8	-	波瀬付
-52	陶器付	6.8 3.8 6.6	-	-
-53	陶器付	15.2 8.0 9.6	-	高輪足・三足
-54	-	23.5 30.0 11.0	-	-
-55	土器付	15.2 7.6 7.1	-	高輪足付
-56	土器付	7.6 5.0 4.1	-	-
-57	-	8.1 5.5 1.3	-	-
PL-18-18	伊万里青竹付	11.0 4.1 5.3	SK-103	見返花文・外返花文・角葉
-58	-	- 5.6 7.2	-	見返五角花文・波瀬露窓・波瀬
-59	-	9.7 4.3 5.1	-	高輪

調査番号	名 営	出 所	年 代	備 考
PL-19-61	伊万里青竹付	9.3 4.2 5.3	SK-103	高輪
-62	伊万里青竹付	10.2 8.3 7.3	-	山文文
-63	伊万里青竹付	10.3 7.9 8.8	-	波瀬露窓
-64	伊万里青竹付	11.5 4.8 5.8	-	見返五角花文
-65	伊万里青竹付	15.2 5.8 7.2	-	三足
-66	伊万里青竹付	9.5 4.0 5.5	-	波瀬露窓
-67	伊万里青竹付	13.8 7.7 3.5	-	見返五角花文・「太明年賀」款
-68	-	14.6 5.5 3.8	-	鷺毛打掛文・波瀬露合彌ハゲ
PL-19-69	-	13.0 20.4 5.0	-	鷺毛打掛文・波瀬露合彌ハゲ
-70	-	11.0 6.3 5.7	-	見返・菊花・唐草文・「太明年賀」款
-71	-	20.0 11.5 4.0	-	鷺毛打掛文・菊花文・見返花文
-72	伊万里青竹付	9.8 - -	-	見返付・角葉
-73	伊万里青竹付	5.9 2.2 2.4	-	扇子文・胡蝶文・見返竹付
-74	伊万里白磁	7.1 2.7 3.4	-	波瀬露合付
-75	伊万里青竹付	- 5.5 -	-	-
-76	土器付	15.0 9.1 7.1	-	H款一蓋すべてお値り
-77	土器付	7.5 8.1 7.1	-	H款一蓋すべてお値り
PL-20-78	虎足	4.9 5.6 7.0	-	-
-79	-	6.85 5.3 7.05	-	-
-80	伊万里青竹付	9.8 7.4 5.9	-	-
-81	陶器付	19.7 7.4 5.9	-	吉田文・見込青合彌ハゲ・高輪高輪
-82	陶器付	- 19.5 -	-	肥前系
-83	-	7.5 - -	-	-
-84	-	1.6 5.5 4.5	-	老子文・萬葉小
-85	陶器付	- 5.4 -	-	肥前系
-86	伊万里青竹付	17.7 8.8 6.5	SK-104	波瀬露合彌ハゲ・見返花文
-87	土器付	17.2 8.8 5.8	-	-
-88	伊万里青竹付	10.5 4.1 5.2	-	外國風文(四脚)
-89	陶器付	13.0 14.8 26.1	SE-105	露窓
PL-21-20	伊万里青竹付	13.8 8.1 2.7	SE-105	露窓・角・虎・筋
-90	-	11.9 7.4 3.4	-	三足・波瀬露窓
-92	陶器付	23.7 11.5 11.0	-	肥前露合付
-93	要打人形	- - -	-	筋・石垣文
-94	伊万里青竹付	10.5 4.3 5.3	SK-101	-
-95	-	8.4 3.8 5.2	-	アヤメの舟付・番付露窓
-96	伊万里白磁	5.3 2.8 3.8	-	-
-97	土器付	8.1 5.8 1.5	-	外御弓・灯明口に使用
-98	-	7.5 6.0 1.0	-	外御弓
-99	陶器付	10.7 5.5 7.0	-	波瀬露合付
-100	-	16.0 4.2 7.1	-	肥前露窓
-101	伊万里青竹付	2.2 4.1 9.6	-	社内文・疊付露窓
-102	土器付	7.5 5.5 1.4	-	外御弓・灯明口に使用
-103	土器付	14.0 9.7 1.8	-	外御弓
-104	伊万里青竹付	10.0 4.3 4.6	SE-102	露窓・筋・蠍の文
-105	-	10.2 4.2 3.7	-	筋文
-106	-	10.3 4.2 5.5	-	波瀬露窓・筋布
-107	伊万里青竹付	11.8 5.0 8.1	-	見返五角花文・角葉・疊付露窓
-108	伊万里青竹付	10.2 3.5 2.5	-	見返五角花文・角葉
-109	伊万里青竹付	10.0 3.8 2.6	-	見返五角花文・波瀬文
-110	伊万里青竹付	10.5 4.2 6.1	-	-
PL-22-111	伊万里青竹付	9.4 5.3 7.3	-	-
-112	伊万里青竹付	10.5 4.5 5.3	-	花園文・疊付露窓
-113	-	8.2 3.6 5.5	-	見返五角花文・疊付露窓
-114	-	10.3 4.4 4.7	-	高輪
-115	-	8.4 4.2 6.2	-	見返五角花文・角葉
-116	伊万里青竹付	10.0 3.9 4.5	-	-
-117	伊万里青竹付	8.2 2.9 4.5	-	疊付露窓
-118	伊万里白磁小瓶	7.2 3.4 4.3	-	-
-119	伊万里青竹付	9.1 5.1 2.1	-	見返五角花文・高輪
-120	-	10.7 6.5 2.4	-	見返五角花文・筋立ちも文

目次番号	品種	高さ	幅	厚さ	備考
PL-22-121	伊万里色絵器	12.5	8.0	2.5	SK-192
-122	伊万里墨絵器	29.0	7.0	10.0	見込玉手箱を色絵で飾る
-123	伊万里墨絵器	9.0	2.5	2.4	見付墨、墨絵文
-124	伊万里墨絵器	14.5	8.0	4.5	見込墨絵器内に文、墨絵文
PL-23-125	伊万里墨絵器	2.55	4.5	11.55	墨絵文
-125	-	-	4.5	-	-
-127	-	2.5	-	12.5	-
-128	脚器	9.0	4.4	3.1	墨絵器、墨絵、足部墨絵、墨絵文
-129	-	9.0	3.6	3.6	-
-130	-	9.0	2.9	5.6	丸形足、墨絵器
-131	-	9.5	2.9	3.5	-
-132	-	10.0	4.5	5.5	口輪墨絵
-133	-	9.0	4.4	5.3	墨絵器、足部及び右側墨絵文
-134	-	12.0	4.6	7.4	墨絵器、墨絵、高台墨絵
-135	脚器	-	8.5	-	高台墨絵
-136	脚器	-	-	-	墨石器類約4.5cm
-137	伊万里墨絵器	10.1	3.9	5.2	SK-113 墨絵器、見込墨文
-138	-	10.2	4.1	6.2	墨文
-139	-	9.7	2.9	5.0	可逆墨、墨文
-140	-	11.0	9.0	6.3	墨絵器、見込墨文、墨絵文
-141	伊万里墨絵器	28.0	17.5	4.0	墨絵器、墨絵、足部墨絵、墨絵文
-142	-	-	7.7	3.6	墨絵器
-143	伊万里墨絵器	10.1	6.0	2.3	内側墨、外側墨で墨絵文で墨絵文
-144	伊万里墨絵器	9.0	4.9	2.4	墨文
-145	脚器	-	10.05	-	SK-134 墨絵器、墨絵文、墨絵、高台に墨絵
-146	伊万里墨絵器	11.1	4.5	7.3	SK-119 墨絵器
-147	白磁器	6.4	2.0	1.8	墨絵器、墨絵文の墨
-148	-	8.6	2.1	1.7	-
PL-25-149	脚器	7.0	6.0	14.0	墨絵器、把手
-150	脚器	16.5	16.5	17.5	-
-151	脚器	12.0	11.7	17.7	-
-152	[伊万里墨絵器]	13.1	6.6	3.2	SK-120 足部墨絵、墨絵文
-153	-	11.4	8.0	3.5	墨絵器
-154	伊万里墨絵器	9.7	3.65	4.35	-
-155	脚器	9.4	5.7	7.2	墨絵器、墨絵、足部墨絵文
-156	-	9.4	4.5	7.1	墨絵器、墨絵文
-157	伊万里墨絵器	5.55	2.0	3.15	足部墨絵
-158	脚器	13.9	4.9	3.6	墨絵器、高台に墨、墨絵文
-159	-	13.9	4.9	3.6	墨絵器、高台に墨、墨絵文
-160	-	7.8	SK-126	-	墨絵器
PL-26-161	脚器	10.6	5.7	2.4	SK-128 足部墨絵
-162	伊万里墨絵器	9.05	4.1	4.8	SK-129 墨絵文(コンニャク印形)
-163	-	10.4	4.75	5.25	-
-164	-	9.05	4.3	6.6	墨絵器、墨絵文
-165	伊万里墨絵器	10.05	5.8	2.9	SK-134 見込墨、墨絵文
-166	土器	17.3	-	11.45	SK-192 Fig. 3-9
-167	土器	22	4.7	1.9	SK-193 赤絵
-168	-	2.2	5.1	1.65	-
-169	土器	11.5	7.4	2.65	SK-194 -
-170	-	12.5	5.3	2.65	SK-192
-171	-	11.05	8.5	2.6	SK-194 -
-172	-	11.2	7.8	2.4	SK-195 -
-173	-	12.5	7.5	3.15	SK-196 -
-174	土器	6.55	5.5	1.3	SK-197 -
-175	土器	11.25	7.6	2.7	-
-176	土器	9.0	7.1	3.35	SK-198 -
-177	-	6.5	6.5	1.3	SK-197 -
-178	土器	11.1	3.8	4.7	SK-194 天正輪印10-22
-179	青磁	-	6.0	-	SK-169 青磁器を墨書き、「鬼」の墨書き
-180	土器	7.05	5.15	1.8	SK-192 赤絵

目次番号	品種	高さ	幅	厚さ	備考
PL-26-181	土器	10.05	7.3	1.2	SK-172 赤絵
-182	脚器	32.0	21.2	7.4	SK-148 實物標本Fig.11-36
PL-27-183	土器	10.05	7.3	1.2	SK-172 赤絵
-184	伊万里墨絵器	8.0	4.9	2.3	墨絵文
-185	高台墨絵器	-	5.1	-	上部墨絵、墨絵文
-186	青磁	-	5.6	-	青磁器
-187	-	14.0	-	-	青磁器、高台墨
-188	白磁	11.75	4.35	5.75	白磁器
-189	青磁	17.1	6.2	8.15	青磁器
-190	青磁	16.0	5.7	9.2	青磁器
-191	-	13.0	4.7	3.05	青磁器
-192	土器	5.7	7.0	1.05	土器
-193	脚器	5.5	5.5	9.0	墨絵器
PL-28-194	青磁	14.0	4.5	3.5	青磁器
-195	-	15.6	4.5	3.7	青磁器
-196	-	15.6	3.5	3.5	青磁器
-197	伊万里墨絵器	13.6	5.1	3.8	墨絵器、墨絵文
-198	脚器	13.0	4.6	2.7	青磁器
-199	青磁	20.0	12.3	3.75	青磁器
PL-29-200	伊万里墨絵器	11.6	4.7	6.5	SK-192 青磁文
-201	-	5.6	5.6	7.5	青磁器
-202	伊万里墨絵器	13.6	8.3	3.4	青磁器
-203	-	13.9	8.2	3.3	-
-204	-	9.7	9.0	3.05	青磁器

表2 出土銅錢一覽表

名 称	目次	目次	目次	備考
寛永通寶	2.25	0.13	SK-102	
小 明	1.85	0.15	-	
小 明	-	-	-	小片
小 明	2.58	0.15	-	2/3枚
寛永通寶	-	-	SK-103	破片
寛永通寶	2.325	0.11	SK-104	
不 明	2.29	0.155	-	2/3枚
寛永通寶	2.41	0.15	SK-107	1068年
寛永通寶	2.38	0.15	SK-111	
不 明	2.61	0.2	SK-115	
不 明	-	0.16	SK-123	破片
地平元寶	2.48	0.15	SK-123	1234年
不 明	2.36	0.12	-	
寛永通寶	2.41	0.1	SK-159	
寛永通寶	2.41	0.11	SK-161	1034年
寛永通寶	2.36	0.12	SK-171	621年
不 明	-	0.19	SK-172	破片
寛永通寶	2.46	0.135	SK-176	
寛永通寶	2.3	0.19	SK-189	
寛永通寶	2.395	0.12	SK-197	
小 明	-	0.11	SP-105	1/4枚
寛永通寶	2.5	0.14	SK-198	
五祐元寶	2.37	0.12	-	1054年
寛永通寶	2.55	0.25	SK-199	
皇宗通寶	2.52	0.1	SK-200	1039年
寛永通寶	2.47	0.175	-	
元祐通寶	2.38	0.18	-	1065年
元祐通寶	-	-	SK-201	3枚重合
不 明	2.45	0.165	SK-202	
寛永通寶	2.5	0.16	SK-203	

P L A T E S



▲(1) 第I調査面全景（東から）

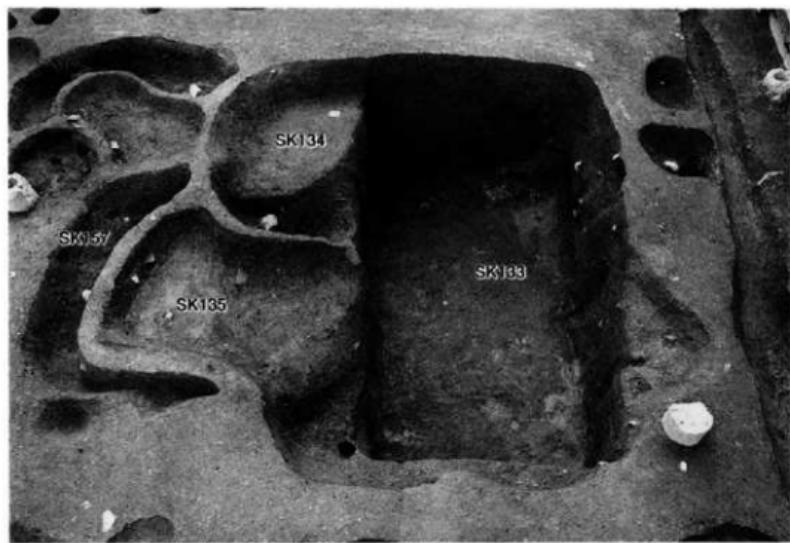
▼(2) SD121出土状況（西から）





▲(1) SK103遺物出土状況（東から）

▼(2) SK133～135・157出土状況（東から）





▲(1) SK145出土状況（南から）

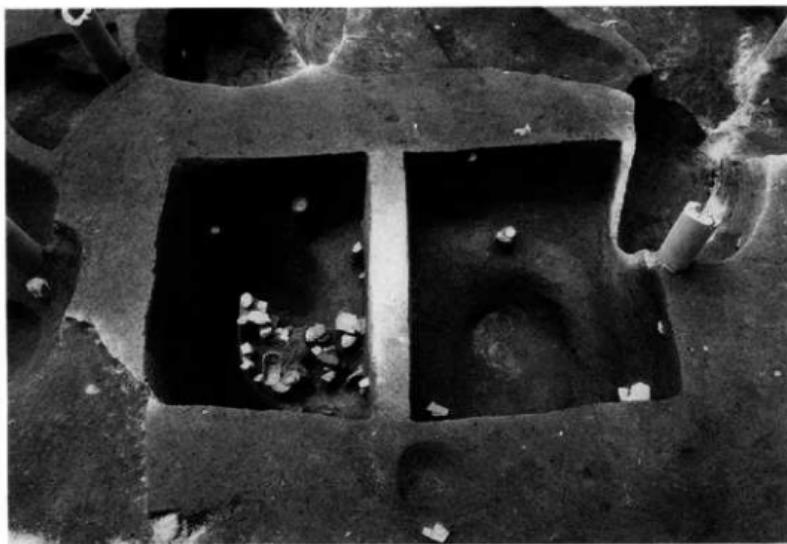
▼(2) SB177出土状況（西から）





▲(1) 第II調査面全景（西から）

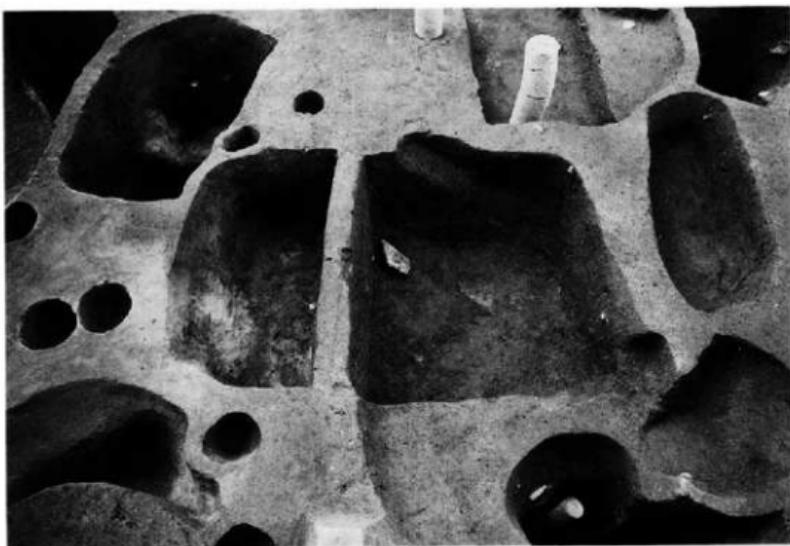
▼(2) SK201出土状況（東から）





▲(1) SK 202出土状況（北から）

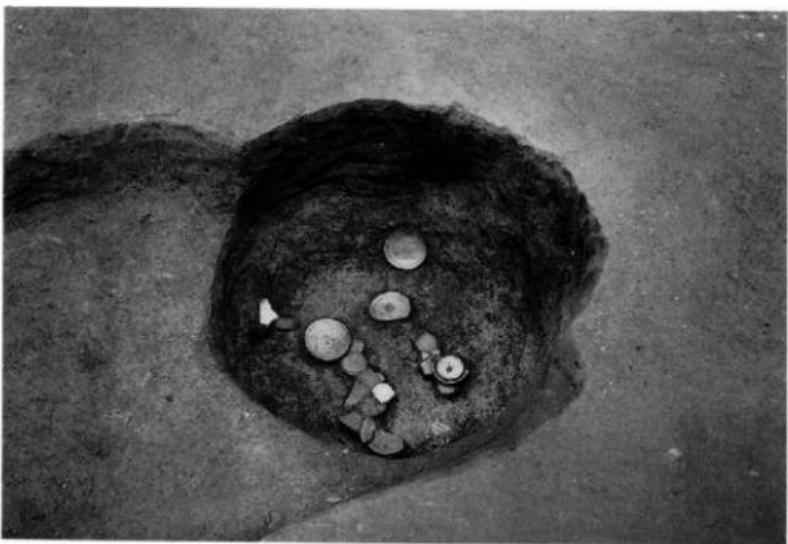
▼(2) SK 204出土状況（南から）





▲(1) SK 205出土状況（西から）

▼(2) SK 228出土状況（南から）





▲(1) SK234出土状況（東から）

▼(2) SK245出土状況（南から）





▲(1) 第III調査面全景（東から）

▼(2) SK 303下面出土状況（北から）





▲(1) SK 303上面出土状況（西から）

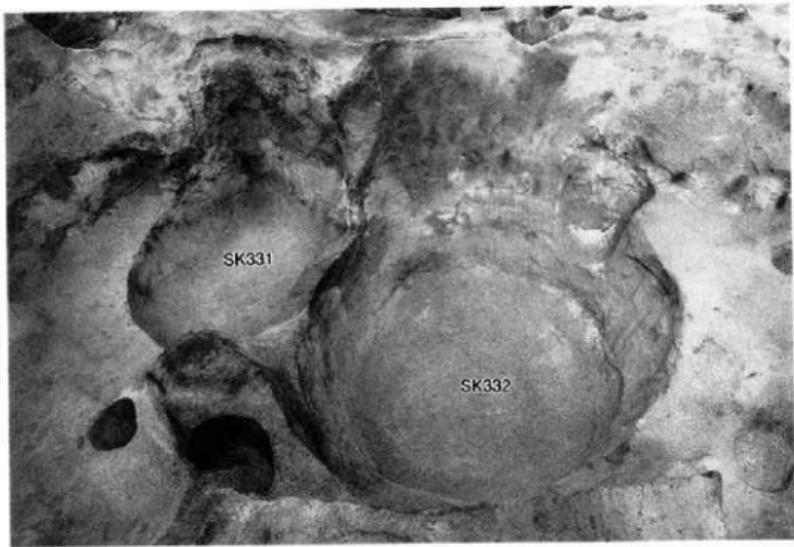
▼(2) SK 308出土状況（西から）





▲(1) SK318出土状況（南から）

▼(2) SK331・332出土状況（南から）





▲(1) SK 333出土状況（東から）

▼(2) SE 309出土状況（南から）





▲(1) SE 311出土状況（西から）

▼(2) SE 327出土状況（東から）

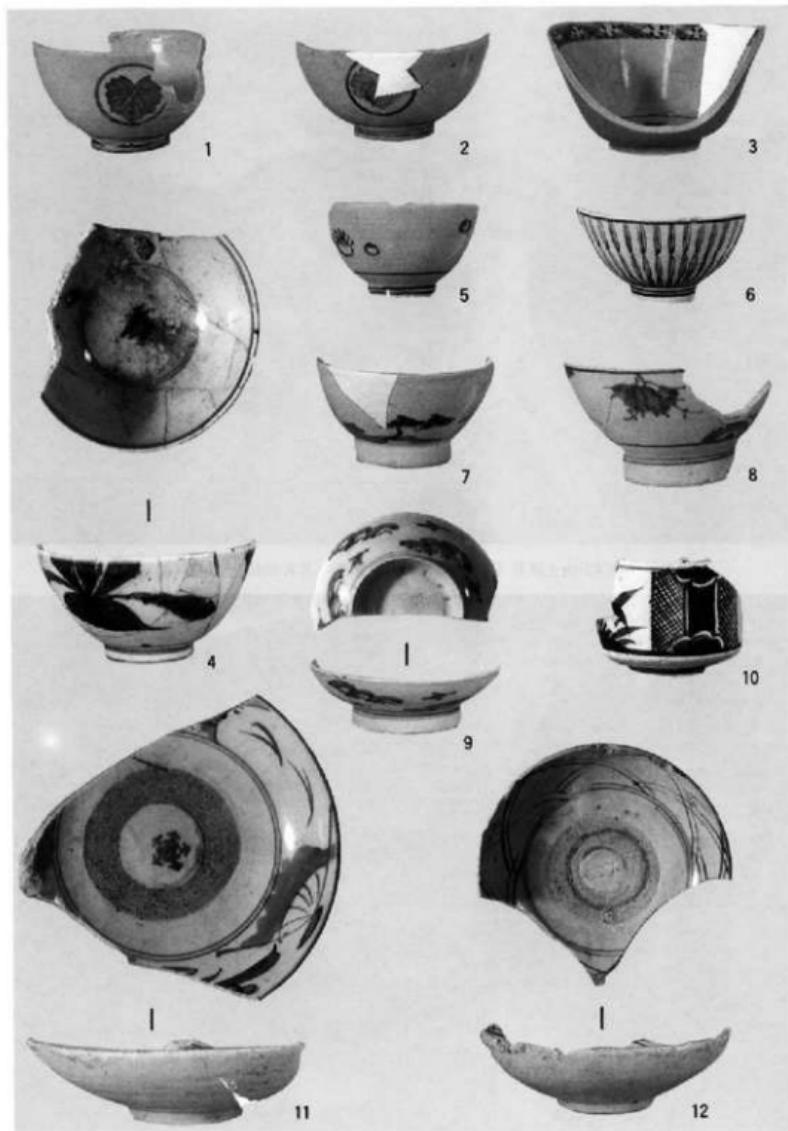




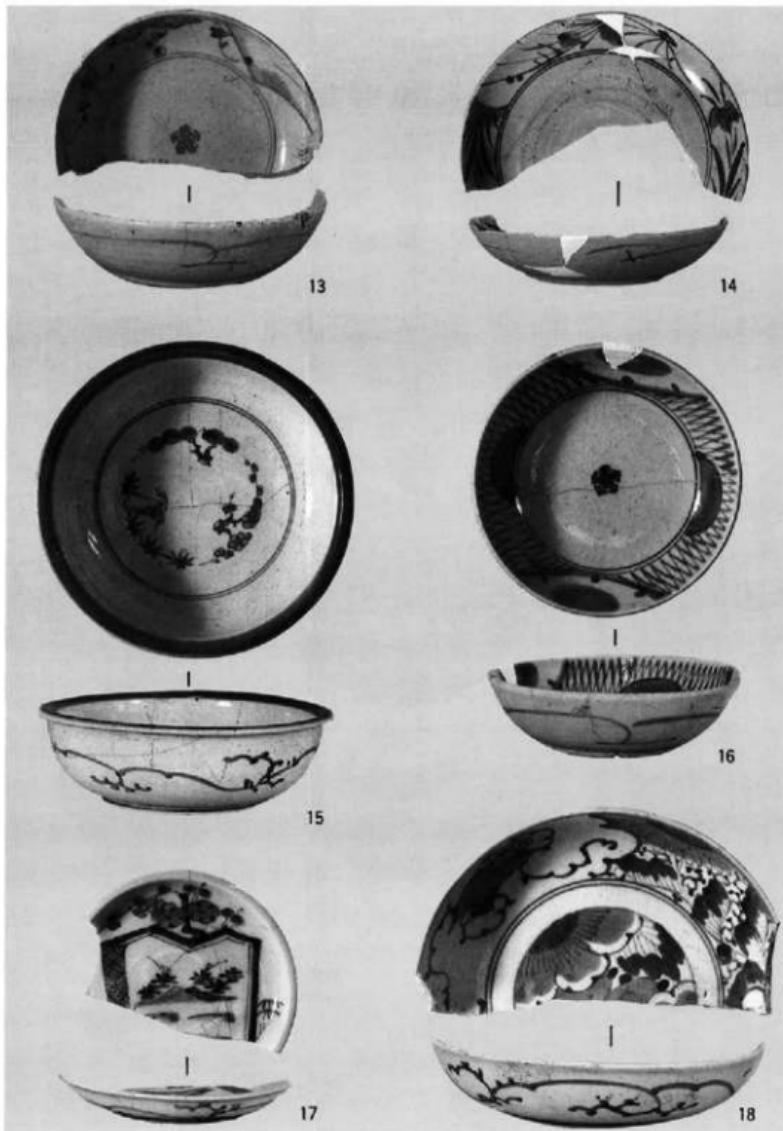
▲(1) SK403出土状況（東から）

▼(2) SK404出土状況（西から）





出土遺物(1)



出土遺物 (2)



出土遺物 (3)



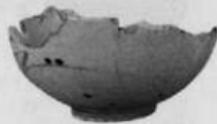
出土遺物(4)



58



60



59



61



63



64



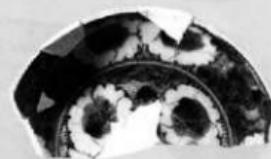
65



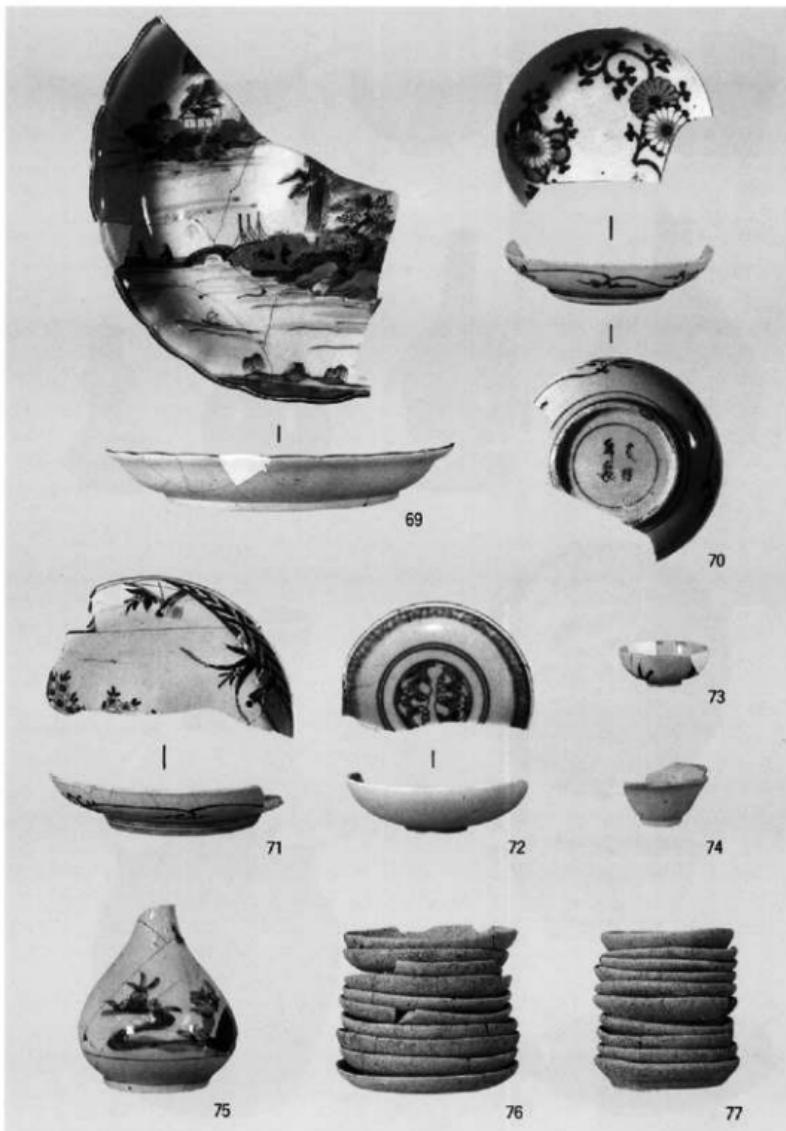
66



67



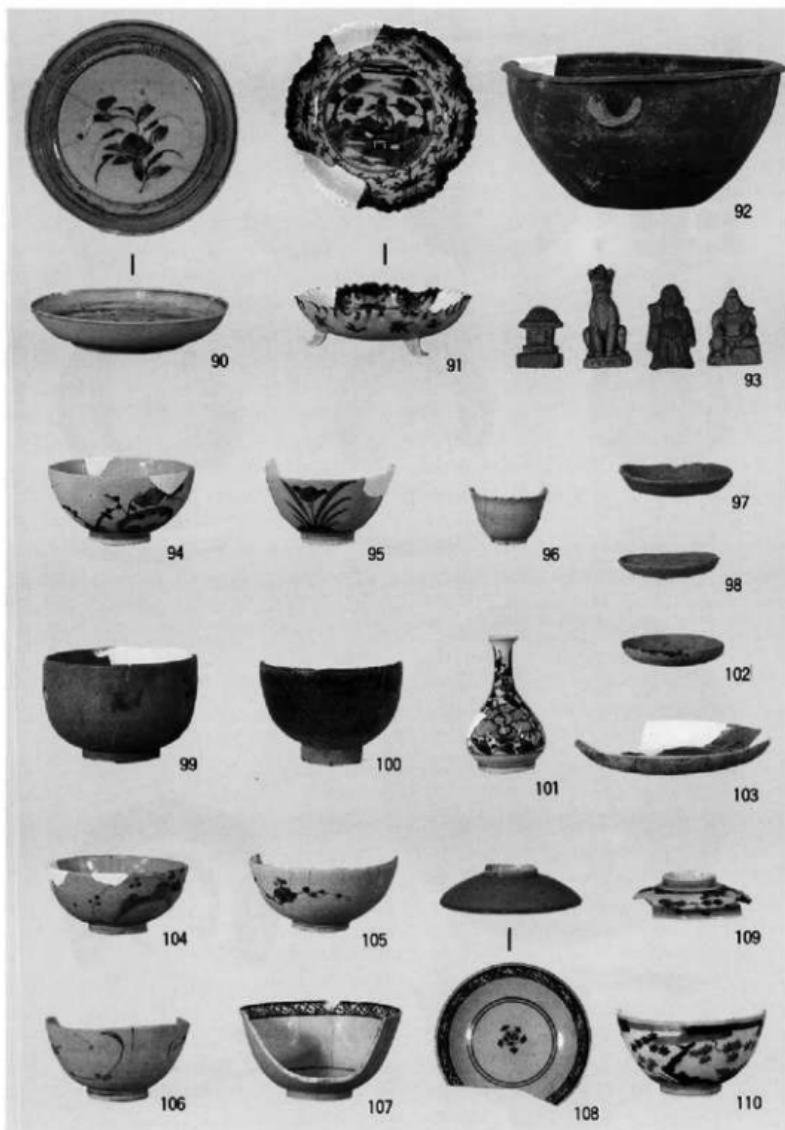
68



出土遺物 (6)



出土遺物(7)



出土遺物(8)



111



112



113



114



115



116



117



118



119



120



121



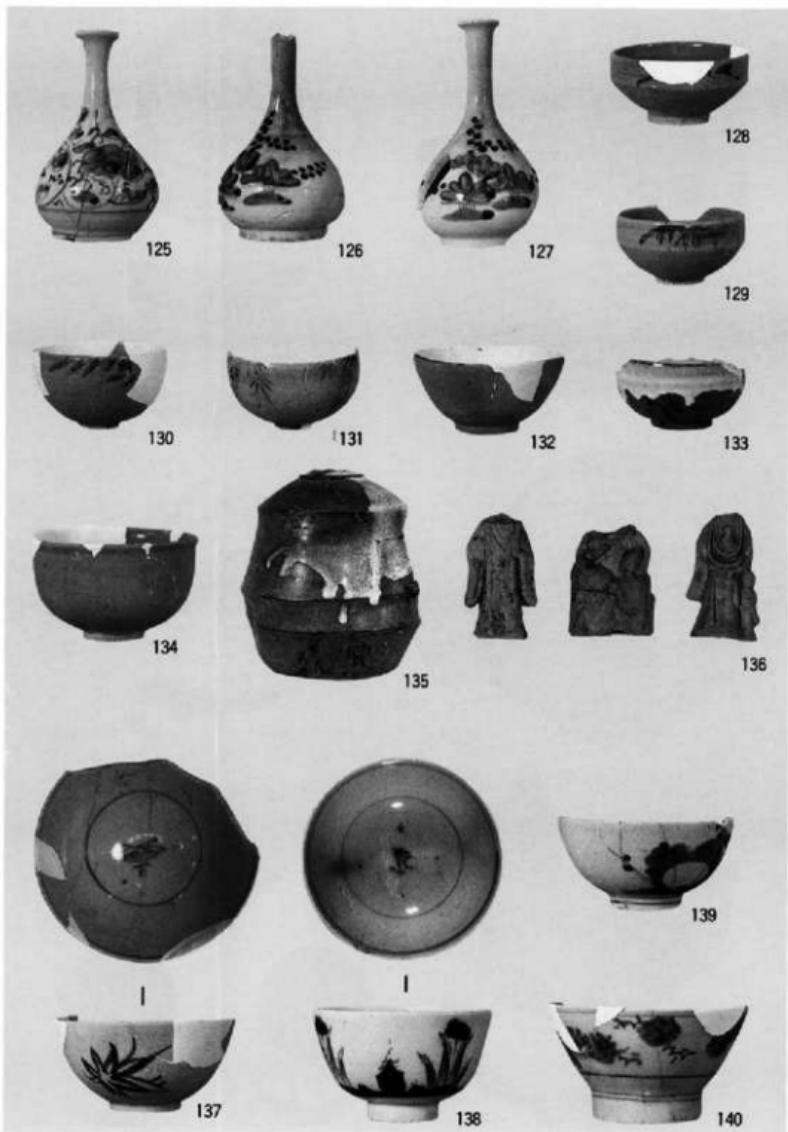
122



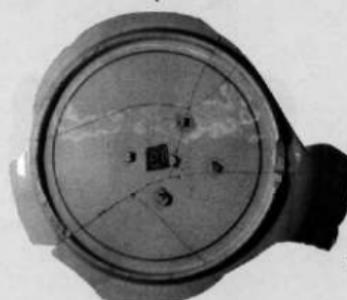
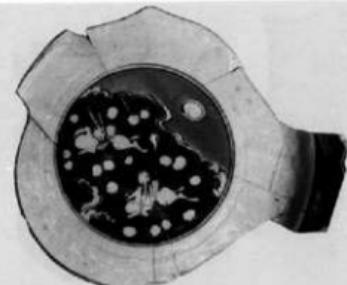
123



124



出土遺物 (10)



141



144



145

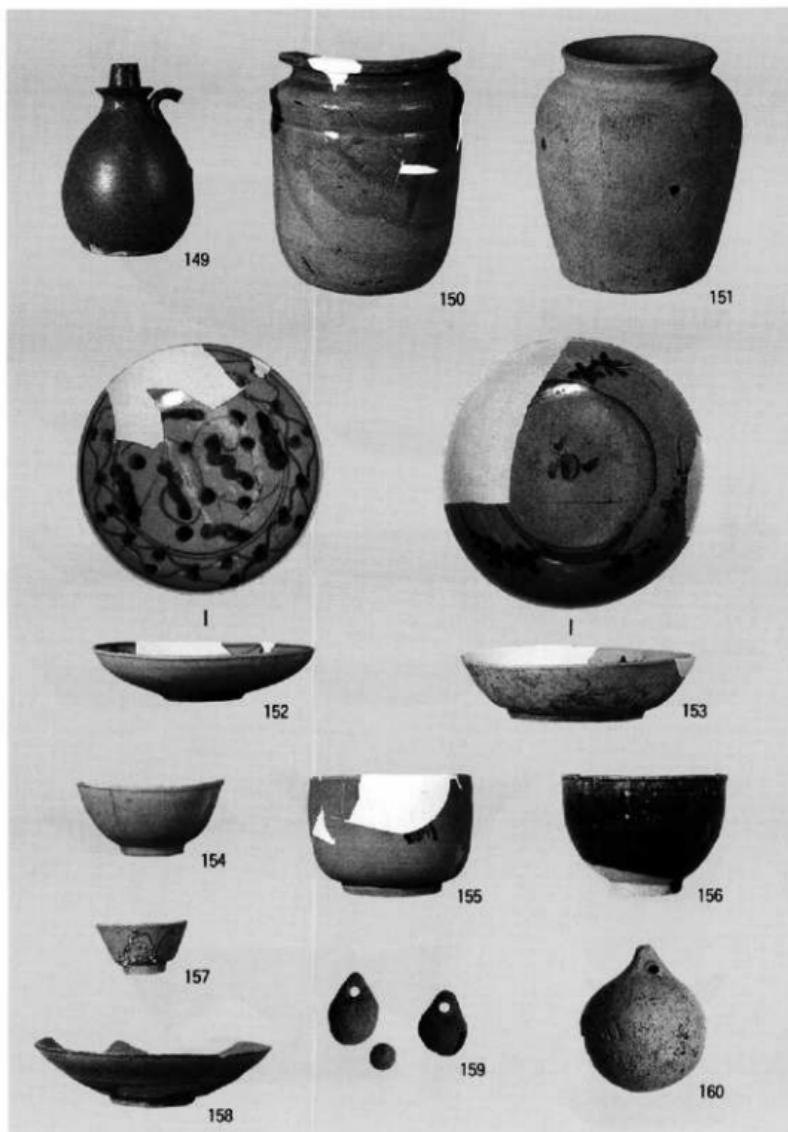


147

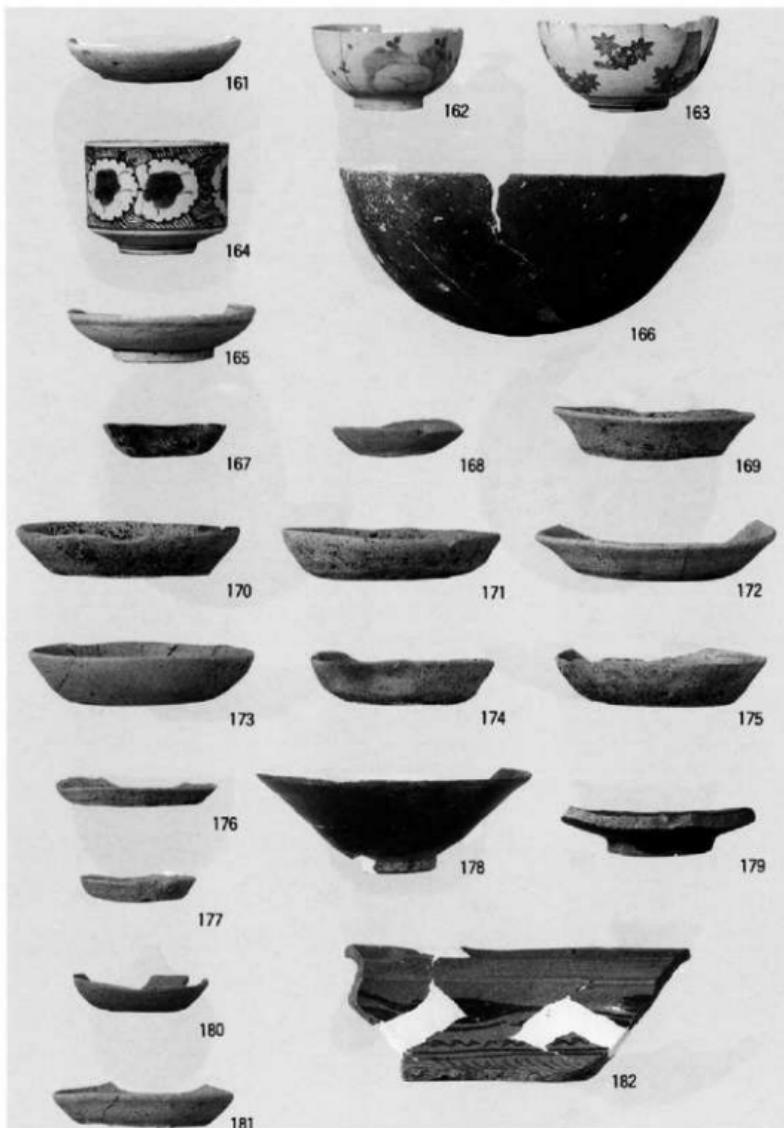


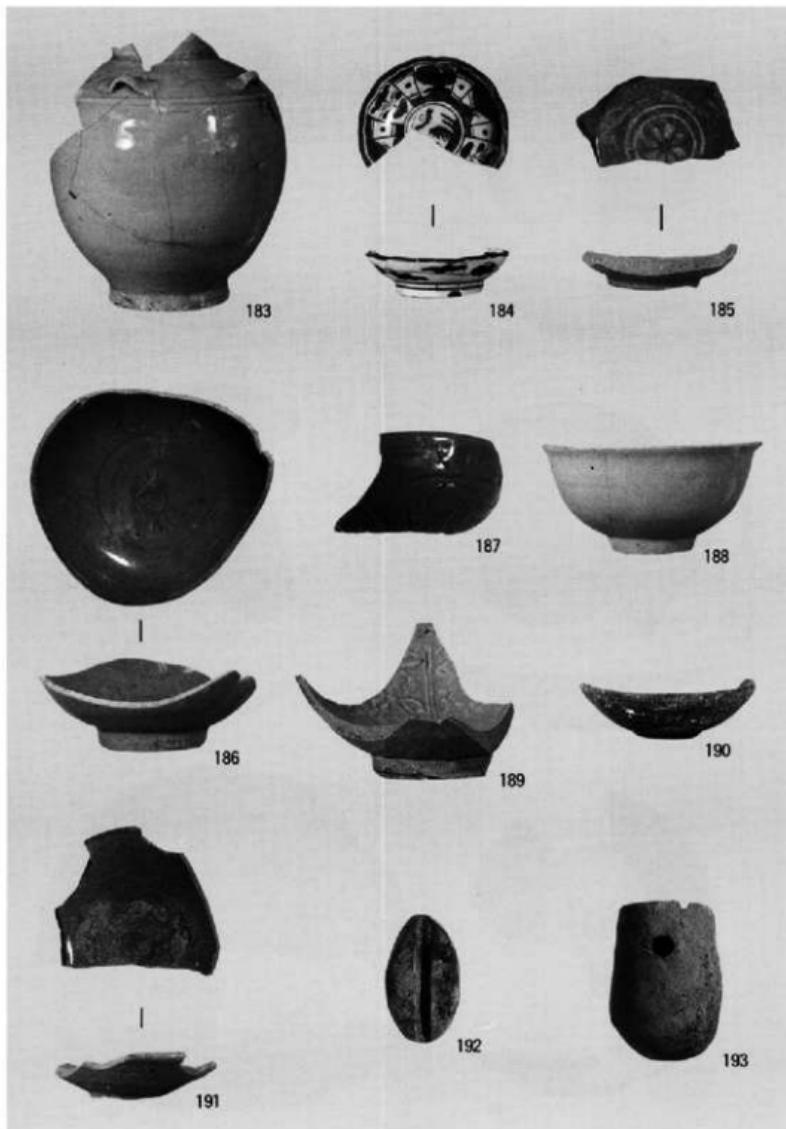
148

出土遺物(11)

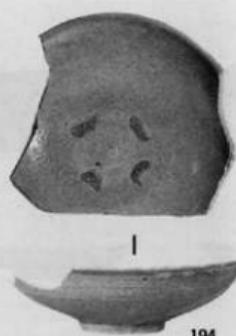


出土遺物 (12)

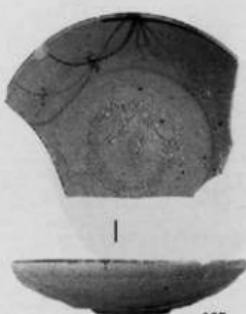




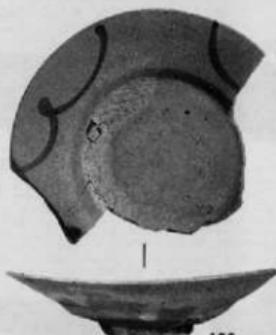
出土遺物(4)



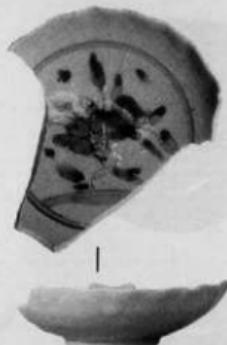
194



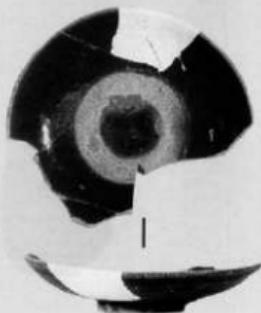
195



196



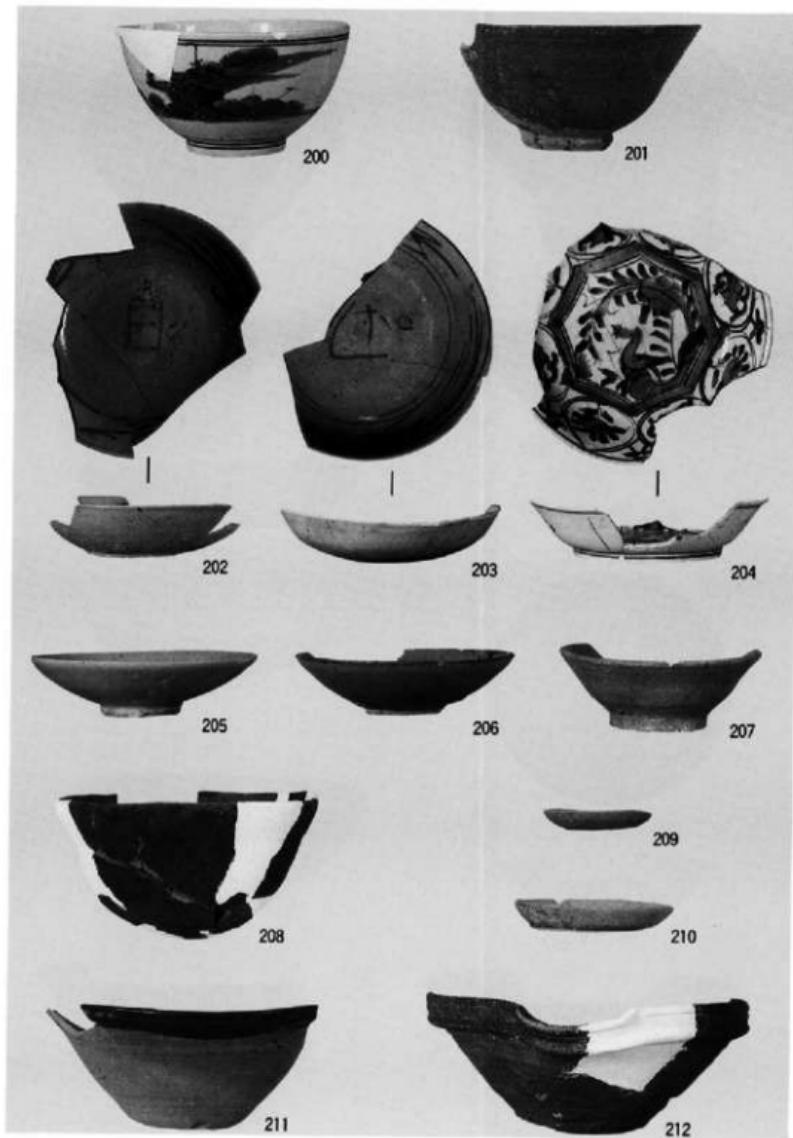
197



198

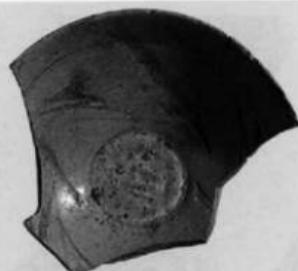


199



出土遺物(16)

一列目左では表1参照 205:白磁 206:陶器
 205-206-209-210-212: S K202 207: S K201
 208: S K203 209-210: 土鍋 211-212: 陶器残片
 211: S K208



214



216



217



218



219



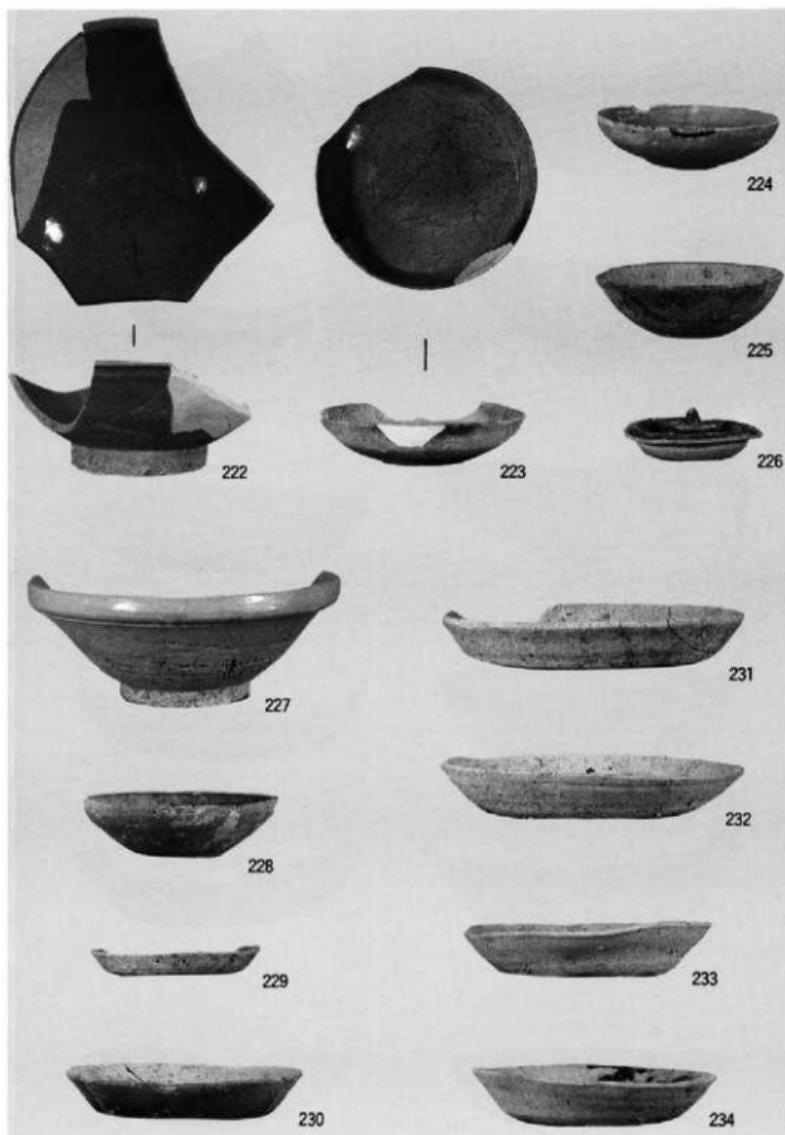
220



221

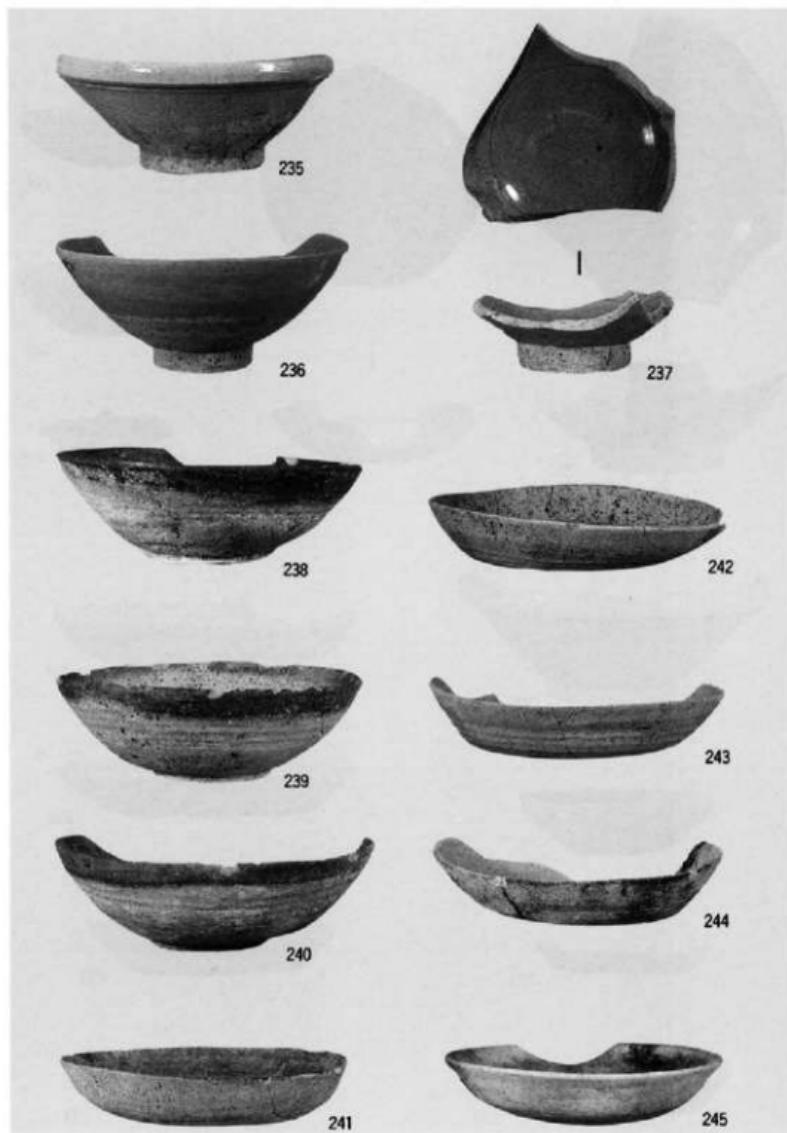
出土遺物(17)

213-218-220-221：白胎 214-217：青胎 215-216：土胎器 219：瓦器
213-216：S K226 217-219：S K230 220-221：S K234



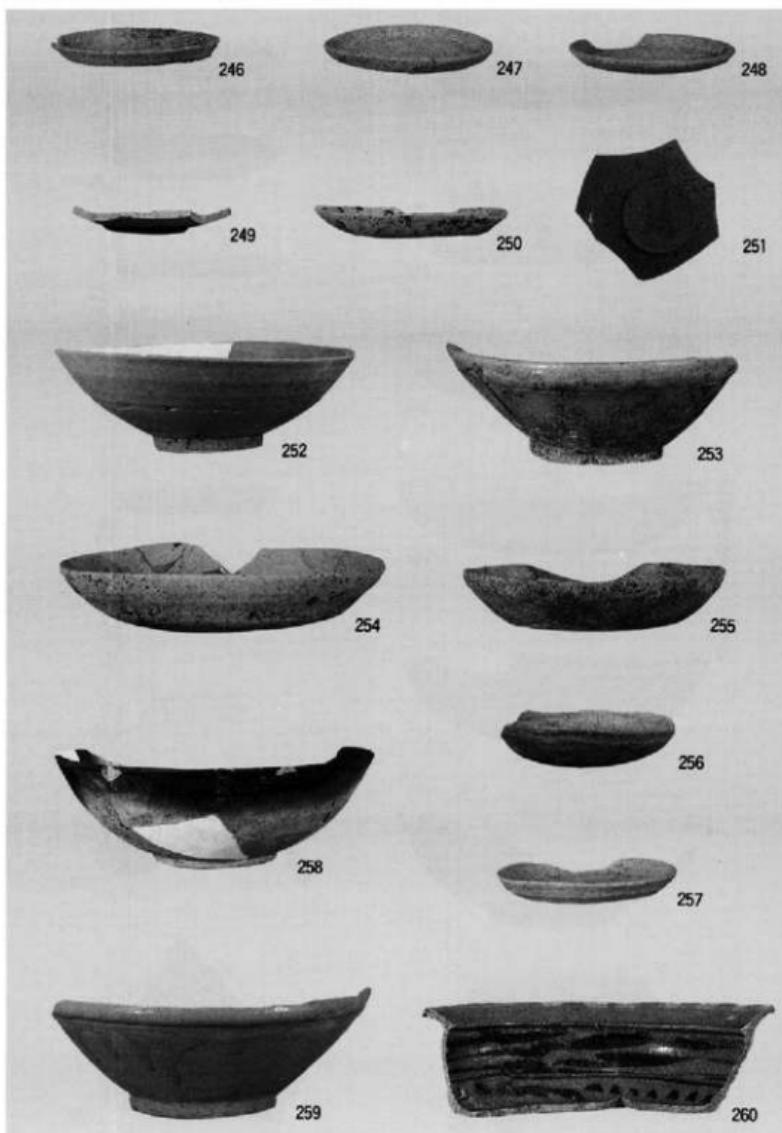
出土遺物(3)

222：青粗 223-224-227：白粗 225-226-228：陶器 229-234：土燒器
222-224-226：S K234 223：S K244 227-234：S K145



出土遺物 (19)

235~237：白胎
238~240：瓦器
239~245：土胎器
239~245：S K303



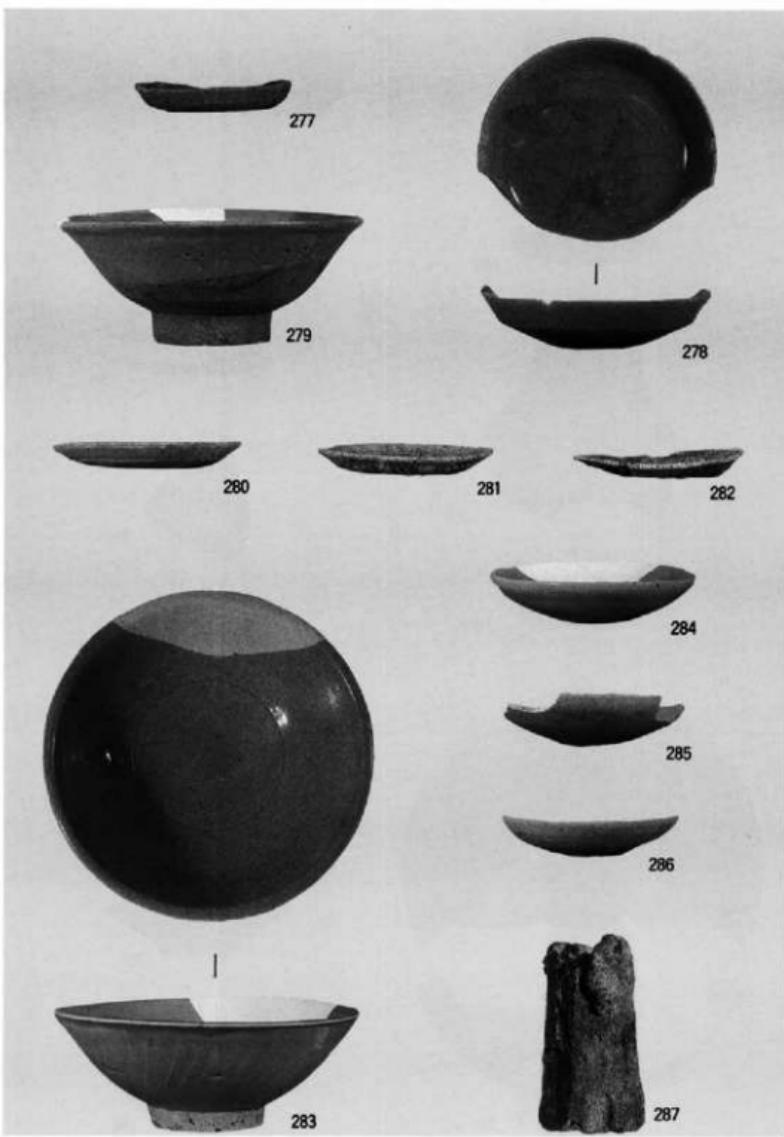
出土遺物 (2)

246~250·254~257：土師器 251~253·259：白胎 258：瓦器 260：陶器
246~248：S K 303 249~256：S K 308 256~258：S K 312 259~260：S K 316



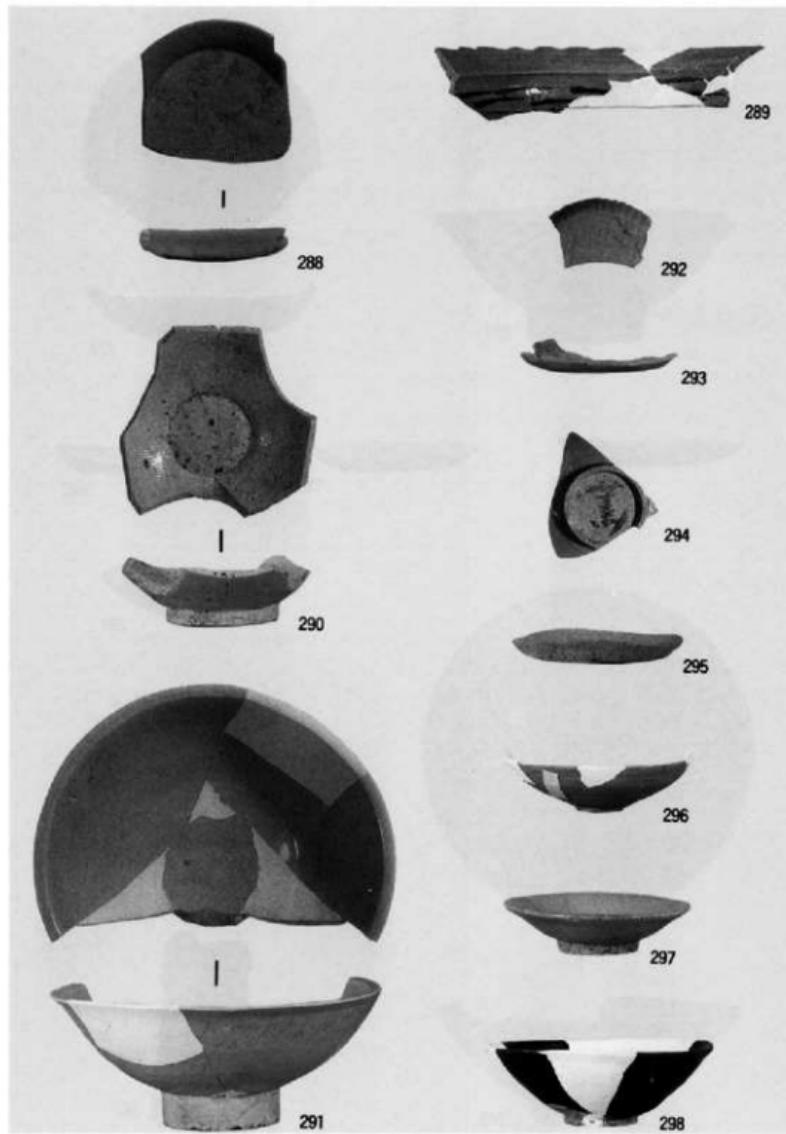
出土遺物(2)

261~268·270~271: 土器器 269~273: 瓦器 272: 青白磁 274: 青磁 275·276: 骨器
261~263·265~268: S K316 264·269~274: S K318 275·276: S K319



出土遺物 25

277-280-282：土器器 278-279-283-286：白器 287：繩羽口
277-278：S K319 279-281：S K332 282-286：S K341 287：S K403



出土遺物 36

288~294：青磁 289~298：陶器 290~291~296~297：白磁 292：青白磁 293~295：土器
288：S E 110 289~292：S E 309 293~296：S E 327

博 多 18

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第246集

平成3（1991）年3月15日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
(092)711-4667

印 刷 同盟印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南六丁目6-1
(092)431-4061

